



# INFOS

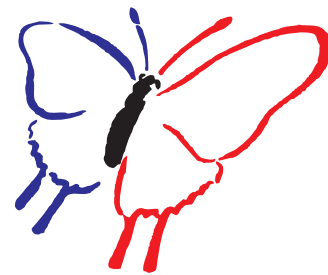
日仏整形外科学会広報誌 **アソフォ**

- |  |   |   |
|--|---|---|
| ■会長……………金子和夫<br>Président ——— K. KANEKO          | ■副会長……………大橋弘嗣<br>Vice-Président ——— H. OHASHI     | ■書記長……………本間康弘<br>Secrétaire général ——— Y. HONMA                                  |
| ■会計……………青木 清<br>Trésorier ——— K. AOKI            | ■書記……………前田 勉<br>Secrétaire ——— T. MAEDA           |   |
| ■幹事……………飯田 哲<br>Membre exécutif — S. IIDA        | 今井晋二 S. IMAI<br>藤原憲太 K. FUJIWARA<br>星 忠行 T. HOSHI | 柁原俊久 岸 孝章 久保俊一 田中康仁<br>T. KAJIWARA T. KISHI T. KUBO Y. TANAKA<br>安永裕司 Y. YASUNAGA |
| ■名誉会員……………小野村敏信<br>Membre d'honneur — T. ONOMURA | 小林 晶 A. KOBAYASHI<br>坂巻豊教 T. SAKAMAKI             | ■顧問……………瀬本喜啓<br>Conseiller ——— Y. SEMOTO  |

■事務局：〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学整形外科学講座（今井晋二）  
Tel. (077) 548-2252 Fax. (077) 548-2254  
Bureau : Maison d'édition: Dept. of Orthopaedic Surgery, Shiga University of Medical Science, Tsukinowa-cho Seta, Otsu, Shiga 520-2192 JAPON

■発行所：〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学整形外科学講座（編集者：前田 勉）  
Tel. (077) 548-2252 Fax. (077) 548-2254  
Maison d'édition: Dept. of Orthopaedic Surgery, Shiga University of Medical Science, Tsukinowa-cho Seta, Otsu, Shiga 520-2192 JAPON (Éditeur : T. MAEDA)

■ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp



2021.3.31  
VOL. 31

# 目 次

【巻頭言】	金子 和 夫	1
【第19回日仏整形外科学会開催報告】	星 忠 行	7
【第19回日仏整形外科学会日程表・プログラム】		11
【交換研修報告】		
My short stay in France	田 中 秀 達	16
交換留学研修報告	平 川 義 弘	20
【追悼 Marcel Kerboull先生】		
Marcel Kerboull先生を偲んで	田 中 千 晶	25
Marcel Kerboull先生の訃報によせて	柁 原 俊 久	29
【フランスからの特別寄稿】		
How to become an orthopedic surgeon in France	岸 孝 章	31
【ホームページ新コーナーのお知らせ】		
ワインエキスパート清の合格体験記 ～2020年7月から10月にかけての濃いめにソーヴィニオンな体験～	青 木 清	41
BogdanのBon voyage!～Vol.1 Provence～	Bogdan PROPECK	51
深遠なるフランス式サンドイッチの世界～Bordeaux編～	藤 城 高 志	55
フランス手術器械のおなまえ	前 田 勉	59
【日本側・フランス側役員の紹介】		61
【AFJO・SOFJO開催一覧】		62
【募集要項(あなたもフランス研修に！)】		63
【フランス人整形外科医受け入れのお願い】		64
【第16回日仏整形外科合同会議 開催のご案内】	田 中 康 仁	65
【第20回日仏整形外科学会 開催のご案内】	柁 原 俊 久	66
【学会各種ご案内・お知らせ】		67
【編集後記】	前 田 勉	70



# INFOS冒頭のご挨拶

順天堂大学医学部 整形外科主任教授 金子 和 夫

## はじめに

私が幼少の頃から熱中していたSF作家のJules VERNEは“法律に逆らうことはできても自然に抗うことはできない”と述べました。2020年10月4日に亡くなったデザイナーの高田賢三さんも同様の言葉を残しています。

高田さんは4月17日読売新聞夕刊に「原点に戻り見つめ直そう コロナ禍の Пари から...」と題した手記を寄稿していました。ご自身がコロナに感染された死後の10月6日に再掲載されたものを引用します。

“今の世の中で、こんな事が起こる事など想像もしていませんでした。

.....僕は2011年の3月11日の日本で起こった東日本大震災の事が脳裏に重なってしまっています。.....これは現実で本当なのかと思ったほどショックな出来事でした。

私たち人間は、たとえ地位があってもなくても、資産があってもなくても、自然に対しては何も対応できないのだと。今回のコロナウイルスに関しても、私たち人間は無力だという事を突き付けられました。家族や友人そして皆、無事であってと願う事しか出来ない。どんなに新しい発明やそして発展があっても、何も出来ずにただ

ただ収束を願うことしか出来ない。

この様な状況の中、人は自然に帰りなさい。そして自然を大事にしなさい。原点に戻って、見つめ直しなさい。物にあふれ、物を粗末にして、そしていないものは捨てていく。そんな事をしていたら、皆滅びるのだよという神様からのメッセージなのかとも思います。

壊れていく自然を大事にする事が、人間の使命なのだよ。と言われている様でもあり、このコロナウイルスが世界を脅かしている中、あらためて生きていく原点を見つめなおす機会であると信じ、自粛し、これからの新しい未来に向かい考えていきたいと思っております。”

以上です。

余談ですが、フランスの国家的な人物Jules VERNEの名を取ったレストラン“Le Jules Verne”がパリ中心部にあります。35年前、私のパリでのメンターであるLORD先生に招待していただいたミシュラン星付き店で、エッフェル塔の第2展望台内にあり、食事も眺望も素晴らしいです(図1)。

## 第19回日仏整形外科学会について

2020年日仏整形外科学会会長の小松整形外科医院の星忠行先生、および多大なるご協力を頂いたJOSKAS会長の石橋恭之教授に深謝いたします。

実は、日本リハビリテーション学会のハイブリッド開催を例に、現地開催を私が幹事会で主張したことは冷汗ものでした。ところが、いざ蓋を開けてみるとハイブリッド開催にもかかわらず100名以上がご参加で、フランス

からのPhillipe NEYRET教授、Laurent JACQUOT先生は、現地時間が深夜であるにもかかわらず、熱心に討論していただき感激しました。

2018年日本整形外科学会での日仏整形外科シンポジウムにも出席いただいたLuc FAVARD先生は、Reverse shoulder arthroplastyを駆使した多くの難治症例での具体的な対処法について説明され、大いに参考になりました。



●図1 Le Jules VERNE (エッフェル塔第2展望台)



●図2 Salles WATANABE





日本からも多くの発表がありました。星忠行会長と小林晶前会長が座長を務めたパネルセッション Surgical Treatment Strategy for Patellofemoral InstabilityにはPhillipe NEYRET教授も加わり、日本ではまだ十分には議論されていない問題についても素晴らしい discussionがされました。

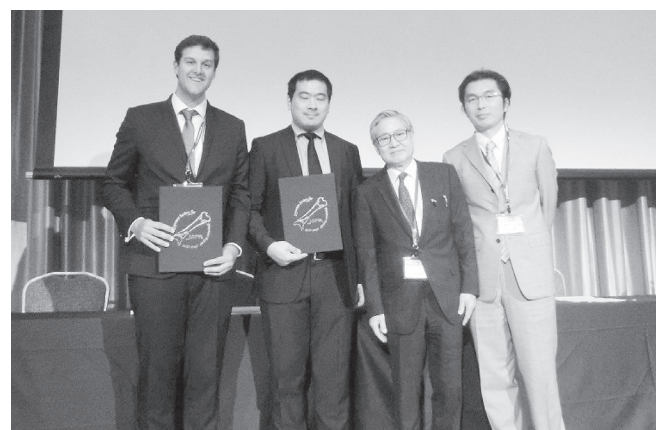
また、小林晶前会長の招待講演「The Great Strides in Orthopaedic Surgery」では、フランス整形災害外科の真髓に触れていただきました。

日仏交換留学帰朝報告では、ボルドーに留学された大阪医科大学の藤城高志助教の「フランス各地のサンドウィッチ評価」が審査員の満場一致で七川賞に輝きました。また、近森病院の岡崎良紀先生が紹介されたのは、留学先のベルサイユにあるMignot病院のSalle WATANABEです(図2)。これは日本の整形外科が誇る、関節鏡の開発者の渡辺正毅先生にちなんで名付けられた部屋です。1974年に渡辺先生は国際関節鏡学会の初代会長に就任され、「Father of Arthroscopy」の称号が与えられました。関節鏡開発のレジェンドとして、フランス整形外科が日本の整形外科医の榮譽を称えるとは、嬉しい限りです。

### 新幹事の岸孝章先生について

役員会の挨拶でも発表しましたが、フランス側幹事に岸孝章先生に加わっていただくことが決まりました。岸先生の寄稿文“How to become an orthopedic in France”は日本の整形外科医養成とは異なる制度を紹介した大変興味深い内容で、若手整形外科医や初期研修医の先生方に一読していただければと存じます。

新書記に就任した順天堂整形外科の本間康弘講師が、Henri MONDOR病院留学時に岸先生と一緒に研修したご縁で、今回日仏整形外科学会幹事の任についていただき、ますます日仏整形外科学会フレンチコネクションが強固になるものと信じております。



●図3 第42回日本骨折治療学会にてフレンチコネクションのセッション(左二人目が岸先生、左端はPhilippe HERNIGOUの長男Jacques HERNIGOU)

これまで岸先生には学会の招待講演で来日いただいたり、岸先生とPhilippe HERNIGOU教授の長男Jacques HERNIGOU先生と第42回日本骨折治療学会ではフレンチコネクションセッションで講演していただきました(図3)。

日本開催2019年ラグビーワールドカップの折にはフランスドクターチームの一員として日本ドクターチームと親善試合を行ったりと、親交を深めてきました(図4・5)。日本語も堪能なので、学会運営がよりスムーズになると思います。



●図5 若手整形外科医とフランス代表選手Serge BETZEN：ピアリッツの解体業者(さくらキャンパス)



●図4 2019.10.5 日仏ラグビー親善試合(さくらキャンパス) French Roosters (Legends) オールフランス/パリジャバニーズ 防衛大OB/順天堂/信州大OB

### Henri MONDOR病院について

Henri MONDOR病院はパリ郊外にあり、Hôpitaux de Paris病院群の中では1969年創立の新しい施設です。

初代教授は棘上筋前進術を開発したJean DEBEYRE先生で、助教授はDidier PATTE先生と、錚々たるメンバーでした。ところが、1992年国際肩学会会長の予定だったPATTE先生は急逝され、パリで開催の同学会の会長は、第2代教授のDaniel GOUTALLIER先生が務めました(図6)。

第3代教授はPhilippe HERNIGOU先生で、第13回日仏合同会議(AFJO)を2015年にSaint-Maloで開催していただきました。Mont-Saint-Michel修道院内の大食堂を貸し切りにした晩餐会は今も脳裏に浮かびます。その

ASSISTANCE PUBLIQUE HÔPITAUX DE PARIS

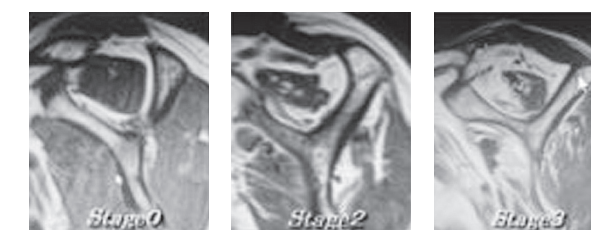
Henri MONDOR病院 歴代整形外科教授  
初代 Jean DEBEYRE先生、PATT助教授  
第二代 Daniel GOUTALLIER先生  
第三代 Philippe HERNIGOU先生  
Laurent LAFOSSE(Annecy)もHERNIGOUの研修医



Didier PATTE (1992年国際肩学会 会長予定であった)



Pr. Daniel GOUTALLIER (PATTEに代わって会長)



MRIの棘上筋萎縮分類

●図6



日が偶然私の誕生日でもあり、皆様から祝っていただきました。

さてHenri MONDOR病院は2019年に50周年を迎えた病院で、本間書記長の留学中に私が訪問した際に感心したのは“託児所の大きさ”でした。全体の6~7割を女医や女子医学生が占めるため、託児所が充実したと推察します(図7)。

心臓移植や肝臓移植などの臓器移植が有名な病院で、日本から多数の外科医が研修しています。

病院名の由来であるHenri MONDOR先生については別の機会に述べたいと思います。



2021年の第94回日本整形外科学会学術集会は、5月20日から23日まで東京フォーラムで行われる予定です。金沢大学教授の土屋弘行会長のご英断で、日仏整形外科シンポジウムが組まれることになりました。私が第42回日本骨折治療学会に招待した、Alain MASQUELET教授とPhilippe HERNIGOU教授が参加予定です。皆様は是非ご出席していただきたいと存じます(図8)。

2022年4月4日から6日に開催の日仏合同会議(AFJO)は、奈良県立医科大学教授田中康仁会長のもと、奈良春日野フォーラムにて桜満開の中で開催予定です。多くの先生方やご家族にご参加していただければと存じます。よろしくお願いたします。



●図7 Paris Henri-Mondor (2019年に50周年) 病院内の託児所

【ES01】

**The 94th Annual Meeting of the Japanese Orthopaedic Association**

**International symposium 1**  
**「Tradition and Innovation in Japanese and French Orthopaedics」**

May 20, 2021 / 10:25~11:45  
Room 12 (JP Tower, Hall 3)

Presentation time : 8min. Discussion time : 20min.

役割	氏名	所属	演題テーマ
Chair	Philippe Tracol	French Orthopaedic Association(SOFCOT)	
Chair	Hirotsugu Ohashi	Department of Orthopaedic Surgery, Osaka Saiseikai Nakatsu Hospital	
1-12-IS1-1	Chiaki Tanaka	Center for Repl. Arthroplasty, Dep. of Orthop. Surg., Gakkentoshi Hosp.	Tradition and innovation in Japanese-French orthopaedics: THA for Crowe IV hips and acetabular revision THA
1-12-IS1-2	Kazuo Kaneko	Dept. of Orthop., Juntendo Univ. School of Medicine	Revolution and innovation of orthopaedics in Japan and France: Looking back into the history of double mobility cup and arthroscopy
1-12-IS1-3	Shinji Imai	Dept. of Orthop. Surg., Shiga Univ. of Medical Science	Arthroscopic latarjet procedure: French innovation and Japanese renovation
1-12-IS1-4	Yuji Yasunaga	Dept. of Orthop. Surg., Hiroshima Prefectural Rehabilitation Center	Tradition and innovation of hip joint in Japanese and French orthopaedics: Kerboul plate and autologous mononuclear cell implantation
1-12-IS1-5	Satoshi Iida	Dept. of Orthop. Surg., Matsudo City General Hosp.	Novel, creative procedures and techniques from France: Line-to-line cementing technique, direct anterior approach and ceramic on ceramic total hip arthroplasty
1-12-IS1-6	Philippe Hernigou	Dept. of Orthop. Surg., Henri Mondor Univ. of Paris Hosp., France	Tradition and innovation in Japanese and French orthopaedics
1-12-IS1-7	Alain-Charles Masquelet	Dept of Orthop Surg., Saint Antoine Hosp., Univ. Paris, France	The induced membrane technique: Why and how I did it ?

●図8 2021年5月20日 日仏整形外科シンポジウム



## 第19回日仏整形外科学会 (SOFJO) 開催報告

# -Passerelle Culturelle et Scientifique-

小松整形外科医院 星 忠行

第19回日仏整形外科学会(SOFJO)を2020年12月19日(土)・20日(日)の両日、神戸国際会議場で開催させていただきました。当初東京オリンピック開催直前の6月に、爽やかな初夏の札幌で開催予定でしたが、COVID-19の感染拡大により、延期を余儀なくされました。延期に当たり、年内のフランスの先生方の来日は困難と予想し、予めビデオ講演、Zoomでの討論をお願いしておりました。しかし、神戸開催が近づく12月になり、感染第3波の影響で更に状況が悪化し、多くの日本人の演者、座長の先生方も現地参加を断念せざるを得ない状況となりました。そこで、学会開催直前になりましたが、来場できない皆様にも本会を聴講いただきたいと考え、急遽、オンラインでのライブ配信を決定し、学会開催形式を、現地開催とのハイブリッド開催形式に変更させていただきました。急な変更でご迷惑をおかけいたしました参加者の皆様にはお詫び申し上げます。

お陰をもちまして、約100名の先生方に参加登録をいただき(来場者約60名・ライブ配信視聴者約40名)、

現地および現地からのライブ配信により盛会のうちに無事終えることができました。

現地の学会は、初日の開会式後(写真1)、青木清先生(旭川荘療育・医療センター)、金城健先生(沖縄県立南部医療センター)の座長の下、恒例の交換留学帰朝報告のセッションから始まりました(写真2)。10名の演者の発表でしたが、Zoom参加もスムーズに行われ、フランスでの貴重な経験を楽しみお話していただきました。拝聴しながら、1日も早く気がねなくフランスへの交換研修に行ける日が来ることを切に願わざるを得ませんでした。最優秀帰朝報告賞(故七川欽次先生の当学会へのご貢献を顕彰して七川賞と冠されています)は、現地出席者の投票で決定いたしました。フランスで食べたサンドイッチ5選”を中心に講演された藤城高志先生(大阪医科大学)がダントツの得票で選ばれました(写真3)。

次に、小林晶先生の招待講演1では、座長をSOFJO会長の金子和夫先生にお願いし、“The Great Strides in French Orthopaedic Surgery”と題して、アングロサ

クソン系とは異なるフランス整形外科の歴史と発展に関する貴重なお話を拝聴させていただきました(写真4)。ディスカッションでは現地会場にいられた日仏整形外科学会名誉会員の小野村敏信先生(93歳)が発言に立たれ(写真5)、Zoomで講演された小林先生(90歳)とのやり取りに、思わず会場から、拍手が沸き上がりました。帰朝報告から始まり、日仏らしい at home な雰囲気です。初日午前が進んでいきました。

次に、内藤聖人先生(順天堂大学)の座長での上肢一般演題に続き、ランチョンセミナーとして、フランス語を交えた水野直子先生(市立豊中病院)の座長のもと、現SOFJCOT会長で、リバース型人工肩関節のパイオニアの一人である Luc Favard先生(Tours)から“Reverse shoulder arthroplasty : Management and special technique for difficult cases”のご演題で、そのテクニック、長期成績に関してのご講演をしていただきました(写真6)。

初日の午後は瀬本喜啓先生(近江愛隣園今津病院)、藤原憲太先生(土居整形外科)の座長での脊椎一般演題

から始まりました(写真7)。このセッションでは演者全員現地参加をしていただき、会場の参加者、座長の先生からも活発なディスカッションが行われました。

次に、招待講演2として竹本充先生(京都市立病院)の座長のもと、Ibrahim Obeid先生(Bordeaux)に“Classification of coronal imbalance in adult scoliosis and spine deformity : A treatment-oriented guideline”のご講演をいただきました。講演では脊柱アラインメントの過去の知見から、手術適応、手術方法、手術成績、治療のアルゴリズムなどをお話されました(写真8)。

次の膝関節一般演題では、大槻周平先生(大阪医科大学)、渡邊新先生(いちほら病院)の座長で、TKA, ACL, HTO, anterior knee painなどそれぞれのご発表に活発に質疑応答が行われました(写真9)。

初日最後のセッションは、招待講演3として、現EFORT(European Federation of National Associations of Orthopaedics and Traumatology)会長で、私が1992年にSOFJO交換留学中、Lyonで特にお世話になったPhilippe Neyret先生(Lyon)に“Is Isolated Anterior



●写真1



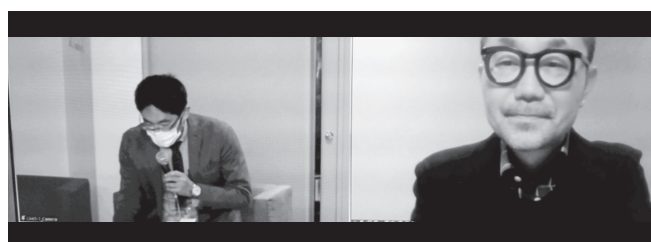
●写真3



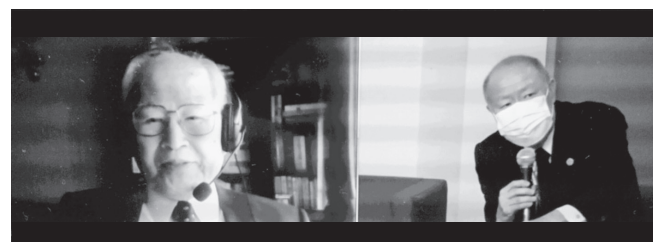
●写真5



●写真7



●写真2



●写真4



●写真6



●写真8



Cruciate Ligament Reconstruction overrated? Have we forgotten about associated lesions?”のご講演をいただきました(写真10)。

講演後、本来であれば全員懇親会でフランス人の先生方と日仏整形外科学会会員の先生方と、ワインを飲みながらの予定でしたが、Covid-19の影響で、立食の会の開催は困難との判断で中止となり、引き続き、七川賞の表彰式を行いました。表彰式では藤城高志先生に賞状と、副賞として、藤原憲太先生にご用意いただきました高級ワインオープナーを授与致しました(写真11)。

2日目の朝はポスター、企業展示会場でのフリーディスカッション形式で、パンとドリンクをご用意致しました。ポスター発表の先生方には、学会直前のWeb形式導入が間に合わず、現地参加ができなかった先生の多くに、郵送展示だけにさせてしまったことを深くお詫びいたします。会場にはSOFJO会長の金子和夫先生、同時期開催のJOSKAS & JOSSM会長の石橋恭之先生(弘前大学整形外科教授)にも足を運んでいただきました(写真12)。

次に、口演会場ではパネルディスカッション“Surgical Treatment Strategy for patellofemoral Instability”を4名のパネリスト、松田匡弘先生(福岡整形外科病院)、大槻周平先生、津田英一先生(弘前大学)、Philippe Neyret 先生に口演していただき、小林晶先生と私の座

長でディスカッションを行いました(写真13)。小林先生からは各演者に膝蓋大腿関節不安定症に対する保存治療の考え方に関するご質問をいただきました。このセッションでは、特に、Neyret 先生には時差8時間(フランス時間午前1:15-2:30)の真夜中にご参加いただき、感謝に堪えません。

続く、招待講演4では、本間康弘先生(順天堂大学)の座長で、2001年にフランス側からの交換研修医として日本に来られた Laurent Jacquot 先生(Argonay)に、こちらも現地時間午前2:30から、“Corail 30 years Clinical Heritage and Asian Line Extension”の演題でご講演をいただきました(写真14)。2012年以降はフランス側からの交換研修医は来られてないのが残念ですが、Jacquot 先生は日本での研修は非常に良い思い出だったと述べておりました。

そして、最後の一般演題股関節のセッションは、大橋弘嗣先生(大阪府済生会中津病院)、本間康弘先生の座長で、THAに関する演題を中心に活発な討論がなされ、全演題が終了致しました(写真15)。

続く閉会式では、閉会のご挨拶に続き、2023年に予定されています第20回日仏整形外科学会会長の柁原俊久先生(横浜南共済病院)からもご挨拶をいただきました(写真16)。柁原先生のご挨拶の中で、感染拡大の中、

現地参加をして良かったと言っていたいただき、face to faceでの現地開催を支持していただけたことに、胸をなでおろす思いが致しました。私としましては、もし開催時期が1週間後であったら、この感染拡大状況では現地開催を断念せざるを得なかったと思うと、ギリギリの開催でありました。

閉会式で全ての学会日程を無事終了させていただきましたが、引き続き2021年1月18日までオンデマンド配信を行い、皆様方には学会終了後も口演を視聴していただけたのではと思います。

学会開催に際しましては、当初から私の出身医局であります弘前大学整形外科学教室、同門会の協力の下での開催を検討し、石橋恭之弘前大学教授の主催するJOSKAS(日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会)& JOSSM(日本整形外科スポーツ医学会)combined meetingとの同時期、同会場での開催とさせていただきました。弘前大学整形外科学教室と本学会との関わりは深く、2002年には故原田征行教授が青森市で第10回SOFJOを開催され、また本学会の日仏交換研修プログラムによりこれまで私を含め弘前大学整形外科学教室員3名にフランス留学の機会をいただいております。このようなご縁もあり、この度19thSOFJO会長の大役を務めさせていただきました。

また、学会のテーマを、整形外科の科学的な議論のみならず、日仏友好交流を文化的にも促進できればとの希望を込めて、“Passerelle Culturelle et Scientifique”(文化と科学の架け橋)に致しましたが、残念ながらフランス人の来日はならず、面と向かっての交流はできませんでした。しかしながら、Zoomの画面を通してですが、深夜にも関わらず、快く参加してくれたフランスの先生方とは心の交流は十分に出来たのではと感じております。

最後に、今回の19thSOFJO開催に際して、現地に参加していただきました金子和夫SOFJO会長初め、SOFJO会員の皆様、石橋恭之教授初め弘前大学整形外科学教室・同門会の皆様、運営事務局コングレの皆様、小松整形外科医院の事務局の皆様に深く感謝いたします。特に、2017年に会長のお話をいただいてから、あらゆる面でご助言、ご指導を承りました小林晶先生には感謝の言葉もございません。未だCOVID-19の感染収束の見通しが立たない今、早く、自由に交換留学を含めた真の意味での日仏整形外科医の交流ができる日が来ることを期待して、学会報告を終えたいと思いません。ありがとうございました。



●写真9



●写真10



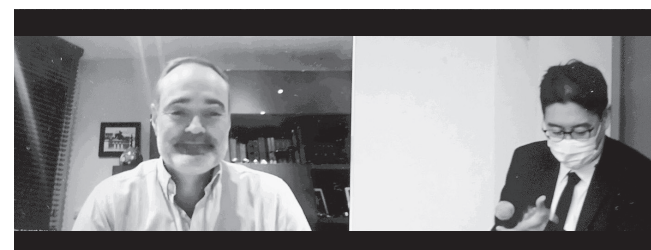
●写真11



●写真12



●写真13



●写真14



●写真15



●写真16





日程表 ※以外は501にて開催

	12月19日(土)	12月20日(日)
7:30	7:30 - 参加受付開始	
8:00		
	8:30 - 8:40 開会式	
9:00	8:40 - 9:50 帰朝報告 座長：青木 清、金城 健	8:30 - 9:00 ポスターディスカッション ※502にて開催
10:00	9:50 - 10:50 招待講演 1 演者：小林 晶 座長：金子 和夫	9:00 - 9:15 Coffee Break 9:15 - 10:30 パネルディスカッション [Surgical Treatment Strategy for Patellofemoral Instability] 座長：小林 晶、星 忠行
11:00	10:50 - 11:30 一般演題 1：上肢 座長：内藤 聖人	10:30 - 11:00 招待講演 4 (ビデオ) 演者：Laurent Jacquot 座長：本間 康弘
12:00	11:35 - 12:35 ランチョンセミナー (ビデオ) 演者：Luc Favard 座長：水野 直子	11:00 - 12:00 一般演題 4：股関節 座長：大橋 弘嗣、本間 康弘
13:00	12:35 - 13:20 Lunch Break	12:00 - 12:10 閉会式
14:00	13:20 - 14:20 一般演題 2：脊椎 座長：瀬本 喜啓、藤原 憲太	
15:00	14:20 - 15:20 招待講演 2 (ビデオ) 演者：Ibrahim Obeid 座長：竹本 充	
	15:20 - 15:35 Coffee Break	
16:00	15:35 - 16:55 一般演題 3：膝関節 座長：大槻 周平、渡邊 新	
17:00	17:00 - 18:00 招待講演 3 (ビデオ) 演者：Philippe Noel Neyret 座長：星 忠行	
18:00		

《12月19日(土) / 神戸国際会議場5F 501》

帰朝報告

座長：青木 清・金城 健

ベルサイユ留学記

岡崎良紀 (岡山大学 整形外科)

2018年度交換研修の帰朝報告

迫間巧将 (尾道市立市民病院)

日仏整形外科学会交換研修(2019)の帰朝報告

岩井智守男 (岐阜大学医学部 整形外科)

フランス留学帰朝報告

金澤憲治 (みやぎ県南中核病院 整形外科)

3ヶ月のフランス滞在で感じたこと

前田 勉 (滋賀医科大学 整形外科学講座)

フランスで学んだ手外科・小児整形外科(帰朝報告)

新谷康介 (大阪市立総合医療センター 小児整形外科)

フランス短期留学報告

田中秀達 (仙台赤十字病院 整形外科)

フランス留学で得た財産

内田 勲 (独立行政法人国立病院機構 栃木医療センター)

ボルドー留学の思い出

藤城高志 (大阪医科大学 整形外科)

帰朝報告

田邊智絵 (昭和大学江東豊洲病院 整形外科)

招待講演 1

座長：金子和夫

The Great Strides in French Orthopaedic Surgery

小林 晶 (日本整形外科学会・フランス整形災害外科学会名誉会員)

一般演題 1 (上肢)

座長：内藤聖人

野球投手における肘頭疲労骨折の分類と発生機序の考察ならびに当院の治療法について

高橋 啓 (慶友整形外科病院)

肘関節外反不安定性評価としての超音波検査によるRing-down artifactの有用性 一高校野球選手における前向き調査一

宇良田大悟 (慶友整形外科病院 リハビリテーション科)

上腕骨外側上顆炎の重症度診断に高分解能MRIは有効である

小川 健 (筑波大学附属病院 水戸地域医療教育センター 茨城県厚生連総合病院 水戸協同病院 整形外科/筑波大学医学医療系 整形外科)

関節リウマチ患者に対するMCP人工関節置換術：AVANTAはSwansonより破損しやすい

肥沼直子 (東京女子医科大学病院 整形外科)



## ランチョンセミナー 座長：水野直子

**Reverse shoulder arthroplasty : Management and special technique for difficult cases**  
Luc Favard (University of Tours, France)

## 一般演題 2 (脊椎) 座長：瀬本喜啓・藤原憲太

**頸髄症患者における頸動脈硬化と臨床症状との関連**  
熊谷玄太郎 (弘前大学大学院医学研究科 整形外科科学講座)

**腰椎分離症において片側偽関節は反対側癒合の阻害因子となる**  
辰村正紀 (筑波大学附属病院 水戸地域医療教育センター／水戸協同病院 整形外科)

**腰椎後方固定術における患者適合型CBT手術支援ガイドの正確性と安全性**  
嶋村佳雄 (田中脳神経外科病院 整形外科／順天堂大学医学部附属順天堂医院 整形外科)

**思春期側弯症手術中の血圧低下に関する矯正操作と画像学的検討**  
和田簡一郎 (弘前大学大学院医学研究科 整形外科科学講座)

**術前メンタルヘルス、術後合併症と矢状面アライメントが成人脊柱変形術後の患者自己イメージに関連する**  
林 和憲 (大阪市立十三市民病院 整形外科／ポルドー大学病院 脊椎外科)

## 招待講演 2 座長：竹本 充

**Classification of coronal imbalance in adult scoliosis and spine deformity:A treatment-oriented guideline**  
Ibrahim Obeid (Bordeaux University, Back Clinic Private Hospital Jean Villar, France)

## 一般演題 3 (膝関節) 座長：大槻周平・渡邊 新

**解剖学的脛骨トレイの脛骨後縁への適合性と脛骨回旋アライメントの検討**  
岡崎良紀 (岡山大学病院 整形外科／ベルサイユ病院 整形外科)

**膝蓋骨非置換CR型TKAにおける膝蓋大腿関節の経時的変化 —10年以上の長期成績—**  
二宮太志 (船橋整形外科病院)

**人工膝関節全置換術の関節周囲多剤注射を行うタイミングは関節侵入前とインプラント設置後のどちらが有効か？**  
塚田幸行 (北水会記念病院 整形外科)

**膝前十字靭帯再建術 (ACLR) 後の心理学的患者立脚型評価 —ACL-RSI scaleにおけるサブカテゴリ評価—**  
金 栄智 (越谷市立病院 整形外科／順天堂大学 整形外科)

**Unrecognised anterior knee painを呈する患者のX線像の検討 —膝蓋骨脱臼患者との比較—**  
中川智之 (慶友整形外科病院)

**開大式高位脛骨骨切り術とハイブリッド閉鎖式高位脛骨骨切り術の比較検討**  
久保田光昭 (越谷市立病院 整形外科)

## 招待講演 3 座長：星 忠行

**Is Isolated Anterior Cruciate Ligament Reconstruction overrated?**

**Have we forgotten about associated lesions?**  
Philippe Noel Neyret (Infirmierie Protestante Lyon, France)

## 《12月20日 (日) ／神戸国際会議場5F 501》

## パネルディスカッション 座長：小林 晶・星 忠行

**人工膝蓋大腿関節置換術にElmslie-Trillat法を併用した治療経験**  
松田匡弘 (福岡整形外科病院)

**膝蓋骨高位を伴う膝蓋骨不安定症に対する治療成績**  
大槻周平 (大阪医科大学 整形外科)

**膝蓋骨不安定症に対する脛骨粗面前内方移行術の長期成績**  
津田英一 (弘前大学大学院医学研究科 リハビリテーション医学講座)

**Surgical Treatment Strategy for Patello Femoral Instability**  
Philippe Noel Neyret (Infirmierie Protestante Lyon, France)

## 招待講演 4 座長：本間康弘

**Corail: 30 year Heritage and range extension**  
Laurent Jacquot (Clinique d'Argonay, France)

## 一般演題 4 (股関節) 座長：大橋弘嗣・本間康弘

**小児期股関節周囲骨切術後変形性股関節症に対するセメントレスTHA**  
柘原俊久 (横浜南共済病院 整形外科・人工関節センター／昭和大学藤が丘病院 整形外科)

**MIYABI-Nail：142mm長のShort Femoral Nailの開発と臨床応用**  
林 宏 (茨城県立中央病院)

**最小侵襲前方進入法によるセメントレスカップと塊状骨移植を用いた初回人工股関節全置換術**  
石田 崇 (横須賀共済病院 整形外科)

**Augmented Reality (AR) を応用した人工股関節置換術ポータブルナビゲーションの開発**  
小川博之 (北水会記念病院 整形外科)

**人工股関節周囲感染におけるセメント・セメントレスによる原因菌の違い**  
大月陽介 (関西医科大学 整形外科科学教室)

**セメントレスシステム抜去を要する人工股関節再置換術**  
おおえ賢一 (関西医科大学 整形外科科学教室)

## ポスターディスカッション・ポスター 1 (股関節)

**トップアスリートに施行したTHA4例の中期成績**  
平澤直之 (北水会記念病院 整形外科)

**変形性股関節症における骨盤傾斜に関与する因子の検討 —脊椎矢状面アライメントの解析—**  
萩原茂生 (千葉大学 整形外科)

**人工股関節置換術後脱臼に対する再置換術**  
豊田敬史 (関西医科大学 整形外科科学教室)

**人工股関節置換術後に生じた自覚的脚長差の原因因子の検討**  
田中朋陽 (静岡赤十字病院)

**骨幹端固定ShrotStem「Metha」の固定様式の評価**  
長沼英俊 (茨城県立中央病院)

# 私達の フランス 研修 1

## ポスターディスカッション・ポスター2（膝関節）

ウサギ大腿四頭筋腱と膝蓋腱の膝蓋骨付着部における線維軟骨層の成長  
六崎裕高（茨城県立医療大学 整形外科）

NexGen 大腿骨コンポーネントとPersona大腿骨コンポーネントの比較 一術後2年での臨床及び画像評価について—  
渡邊 新（いちほら病院 整形外科）

TKA 術後患者の立ち上がり動作の三次元動作解析 一近代型TKAと従来型TKAにおける運動学、運動力学と筋活動の比較—  
兵頭康次郎（筑波大学医学医療系 整形外科）

## ポスターディスカッション・ポスター3（脊椎）

土方式による経皮的椎間板洗浄とPPSによる後方固定で治療した化膿性脊椎炎の1例  
蒲田久典（地方独立行政法人茨城県西部医療機構 茨城県西部メディカルセンター 整形外科／筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター・茨城県厚生連総合病院水戸協同病院 整形外科／筑波大学医学医療系 整形外科）

内視鏡下横突起部分切除で症状改善が得られたBertolotti症候群の1例  
内田絢子（筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター 茨城県厚生連総合病院水戸協同病院 整形外科）

PED システムを用いた生検および洗浄が有用であったカンジダ性脊椎炎  
奥脇 駿（県北医療センター高萩協同病院 整形外科）

腰椎術後硬膜外血腫におけるリスクファクターとしての脊柱管の形状  
山本りさこ（厚生連吉田総合病院 整形外科）

## ポスターディスカッション・ポスター4（上肢・その他）

外傷後変形性肩鎖関節症に鏡視下鎖骨遠位端切除を行った1例  
増谷守彦（小松整形外科医院）

早期骨置換を目指した人工骨・多血小板血漿複合材料の新規開発：人工骨の多血小板血漿担持に関する基礎研究  
新井規仁（筑波大学医学医療系 整形外科／筑波大学医学医療系 整形外科 運動器再生医療学）

整形外科術後の睡眠状態  
鈴木愛理（筑波大学附属水戸地域医療教育センター 水戸協同病院 整形外科 看護部）

## ポスターディスカッション・ポスター5（足関節・足）

局所陰圧閉鎖療法と関節内持続洗浄療法の併用により治療した人工足関節置換術後感染の1例  
飛松晴貴（東京女子医科大学 整形外科）

外側進入型人工足関節置換術における創癒合不全発生率の検討 一前方進入型人工足関節置換術と比較して—  
山崎和明（東京女子医科大学 整形外科）

関節リウマチ前足部手術における第1-2中足骨頭術後高位差と胼胝再発の関連  
飛松晴貴（東京女子医科大学 整形外科）

2020年2月に約3週間、日仏整形外科学会の交換研修制度を通じて、渡仏する機会に恵まれ研修を行って参りました。主に股関節の診療を行っている施設への滞在を希望し、FranceのRouenとParisで研修することができましたので報告いたします。

### 応募の動機

私は2007年に東北大学を卒業、2010年に入局し主に外傷と股関節外科についてトレーニングを受けました。これまで国外の医療事情、歴史や医療について学ぶ機会が少なく、同門の先輩方に「世界を見て来い！」と日仏交換研修をすすめられたのがきっかけです。フランスからこれまで多くのユニークかつ堅実な発想のもとに開発された治療法が報告されています。こうした背景があり、フランスに行ってみたくと思うのは自然なことかもしれません。

### 渡仏前

2019年末から渡仏する準備をしておりました。持ち物や場所の確認などはもちろんですが、挨拶や数字くらいは理解していた方が良いだろうと簡単なフランス語の本を読み気持ちを高めていました。しかし、問題が発生します。コロナウイルス感染症です。2019年12月に中国で報告され、2020年1月に日本や韓国などアジアを中心に広がり、世間が騒々しくなってきました。渡仏予定としていた2月初旬の段階では、ヨ

## My short stay in France

仙台赤十字病院  
田中秀達

ヨーロッパで報告が極めて少数でした。先輩から2003年にSIRSが発生した時は海外渡航禁止となったためAustriaでのEFFORTに参加できなかった話などを聞きました。今回も状況がどう変化していくか読めず帰国できない可能性もありましたが、「禁止されていないなら行って来たら？」という言葉に押され、延期はせず行くことにしました。行きの飛行機の中で隣の座席の方がParis在住37年の日本人の方で、「コロナウイルスの件で、アジア人に対しては厳しい目があり、治安には十分に注意したほうがよい」という情報を得ました。少々不安になりましたが、後戻りはできません。

### France到着～Rouen (Clinique Du Cèdre訪問)

私の心配をよそに、Paris市街は落ち着いていました。12月にストライキがあり電車が止まっていたらしいのですが、普通に運航しており安堵しました(写真1)。



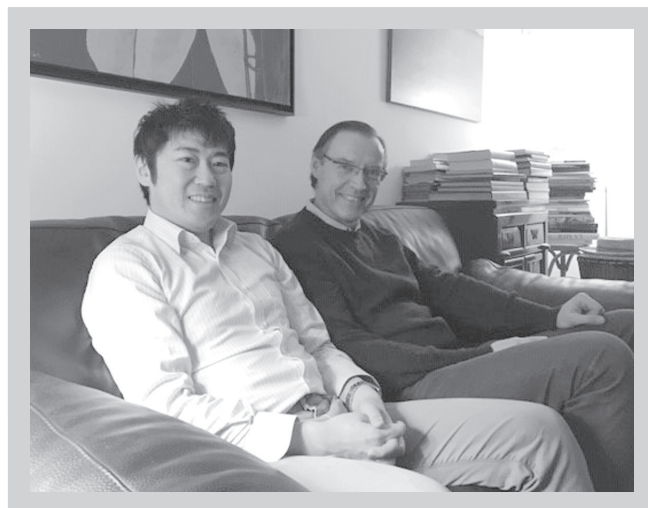
●写真1 左：Gare Saint Lazare構内の様子  
右：Gare de Rouen-Rive-Droite



マスクしている人は誰もおらず、マスクをすると返って危険であると言われていたため付けずに過ごしました。ParisからRouenまでは電車で約1時間半です。Rouenはノルマンディー地方の代表都市で、Parisに比べて静かで落ち着いた雰囲気でした。Église Jeanne d'Arc、Cathédrale Notre-Dame de Rouenなどが観光地として有名です。訪れたClinique Du Cèdreは中心街から少し離れた丘の上に位置しており、病院の前にCèdre=杉がありました(写真2)。私の生まれは杉の木が多い秋田で、何となくですが親近感がわきました。Pascal Vié先生はとてもダンディーで気さくな先生でした(写真3)。手術は牽引台を使用したHybrid THAを



●写真2 Clinique Du Cèdre



●写真3 Pascal Vié先生宅にて

見学させていただきました。手術のコツなど多くのことを教えていただきました。Vié先生の自宅にお招きいただき、奥様とシャンパンをいただきました。街の中心部も案内していただき、夜のRouen市街を散歩したのはとても良い思い出です。家族のこと、日本のこと、フランスの情勢など国を超えて意見を交換できたのは貴重な体験でした(写真4)。



●写真4 左：大聖堂 右：時計台

## Paris (Clinique du Sport, Clinique Arago)

Clinique du SportのFrédéric Laude先生はAnterior minimum invasive surgery (AMIS) THAの開発で有名な先生です(写真5)。手術を見学させていただきましたが非常に早く、手際が良くあっという間に数件のTHAが行われました。通常のDAA THAの皮膚切開以外にピキニラインでのTHAを行われていました。視野が悪くなり難易度は上がると思いますがスムーズに行われておりました。たまたま予定されていた、Periacetabular Osteotomyも見学させていただきました



●写真5 左：Clinique du Sport  
右：Frédéric Laude先生と

た。牽引台を使用しており、骨切りを牽引台を使用して行っているのを始めてみました。股関節屈曲を保持できる、透視を入れやすいという点で、有用だと思いました。非常にスムーズに行っておりました。いろいろピットフォール等聞いてみましたが、たいていの御返事が経験を積めば大丈夫とのことでした。発想や考え方が天才的なのでしょう、世界にはものすごい先生がいるものと感じた次第です。

Luc Kerboull先生がいらっしゃるClinique Aragoでも研修させていただきました(写真6)。非常に親切な先生で、楽しく過ごすことができました。THA,TKAを見学させていただきましたが、丁寧に組織を扱われていました。仙台を訪問したことがあり、東日本大震災のことなどに触れ、海岸部の復興の状況など気にかけてくれたのが非常に印象的でした。Clinique Aragoの手術室の名前が、整形外科の有名な先生の名前で構成されており、ユニークでした(写真7)。フランスに限らずヨーロッパの整形外科の歴史を感じました。

## 2020年2月 Parisの街の様子～帰国

2月前半は特段変わったことはなかったと思います(写真8)。コロナウイルス感染に関しては、近郊の中国人が経営するレストランで暴動がおこった等のニュースはありましたが街中で危機を感じることはありませんでした。滞在したホテルや、レストラン等でも雰囲気を聞いてみましたが平時と変わらなかったようです。2月下旬にイタリア北部で増え始め、フランス国内でも少しずつ感染者が確認され、少数ですがマスクを着けている人を見かけるようになりました。2月初旬の楽観的な街の雰囲気が、少しずつですが緊張してきた印象を受けました。3月初めに帰国しましたが、日本を出国した時とはガラッと雰囲気が変わり、到着した時の羽田空港が閑散としていることに驚きました。

フランスは2020年10月から外出禁止令、12月から夜間外出禁止令が出ています。日本に比べると厳しい対策で、非常にストレスを感じている事と思います。渡仏して1年が経過しますが、コロナウイルスがここまで世界的に大流行するとは全く想像ができませんでした。1日でも早く終息し、以前のように海外へ自由に出かけられるようになることを願っております。そし



●写真6 Luc Kerboull先生と



●写真7 Clinique Aragoの手術室の名前。有名な先生の名前が付けられておりユニークであった。



●写真8 左：2020年2月中旬のMusée du Louvre内の様子。混雑しています。 右：2月下旬のPalais Garnier前



# 私達の フランス 研修



## 交換留学研修報告

大阪市立大学整形外科  
平川 義弘

て、日仏整形外科学会交換研修を通じて、海外で貴重な経験を積む先生方が今後も増えていくことを願っております。

### 謝辞

このような素晴らしい機会を与えてくださった日仏整形外科学会の役員の先生方、訪問先の調整をしてくださった西脇徹先生に感謝申し上げます。この度の研修をご快諾いただいた仙台赤十字病院、同門の先生方に感謝申し上げます。今後、この留学経験を生かしていく所存ですので、今後ともよろしく願い申し上げます。

2019年度日仏整形外科学会の交換留学研修に志願し、2019年3月末より2020年1月までフランスで研修してきましたのでご報告いたします。

私は普段肩関節分野の診療をメインにしておりまして、フランスでの留学をもともと希望していました。その念願叶い留学先のフランスでは肩関節の診療を中心にされている2カ所の病院の先生に指導していただきました。2019年4月よりフランス第2の都市LyonにありますCentre Orthopedique Santy (以下、Santy) という病院で、Lionel Neyton先生に御指導頂きました。また2019年7月からは、かの有名なモン・サン・ミッシェルの窓口になりますRennesという都市にあるSaint-Gregoire hospitalという病院にてPhilippe Collin先生(コリンではなくて、コランです。)のもとで6カ月間勉強させて頂きました。そして、年明けに再度Lyonに戻りSantyで研修させて頂きました。フランスは反転型人工肩関節置換術、Reverse Shoulder Arthroplasty (以下、RSA)の生誕の地であり、そのルーツを探る留学生活でした。また不安定性肩関節症に対するLatarjet法が生まれたのもフランスであり、臨床的な手技と、そのマインドや歴史的背景を少しでも獲得することが今回の留学の目的でした。

### フランス留学開始まで

留学の計画を立てた時は、深く考えずに留学するなら1年だろうという考えで、留学先のアポイントをとりましたが、ビザを取得するのに大変苦労いたしました。

た。結局ビザがとれたのは渡仏してから3ヶ月後の一時帰国の時でしたので、大変な労力と時間とお金を無駄にしました。ビザを取得するのは年々厳しくなっているとのことで、今後ヨーロッパ圏に留学するのはビザが不要な3ヶ月以内がおすすめだと思います。またフランス語で現地での会話を楽しみたいと思っていたので、フランス語の勉強も留学する1年半前から頑張っていました。

### Lyonでの研修

肩関節領域では世界一有名なGill Walch先生の施設SantyにてNeyton先生にご指導いただきました。Santyはプライベートホスピタルであり、4階建ての比較的小さな建物で、中に膝、股関節、脊椎、ハンド、肩などのユニットに分かれており、肩ユニットには8名の肩関節に従事する医師が在籍しており、執刀医が6名、肩関節専門のリハビリテーション医が2名おられました。個人的な意見として、Neyton先生はGill先生の後継者といった感じの先生で、Gill先生の信頼も厚く、手術も非常に丁寧でとても勉強になりました。なかでもOpen Latarjet法が最もこだわりが強く、鏡視下でやる必要はないと言われていたのが印象的でした。

Neyton先生の1週間は月曜日1日中外来、火曜日、木曜日1日中オペ、水曜日、金曜日午前中のみ外来といった具合でした。外来は1人あたり20分から30分はしっかりかけて患者を診察されておりました。Latarjetの患者は術後3カ月の時に1度みただけでフォロー終了と



というのは衝撃でした。またリハビリもセルフリハをかなり強く推奨されており、患者さんにとっても足繁く病院に通う必要がないため自然と外来の患者数が制限されている様でした。日本の患者さんにおいてはしばしばリハビリに通う事に依存しすぎている状況も感じておりましたので、自己リハビリの重要性を再確認しました。研修中に肩リハビリ専門の先生の外来を見学することもでき、フランスでの自己リハビリのプロトコールを教えていただき日本でパンフレットを作成し、日本でも実践しております。

また患者さんは自分の画像データを紙とCDで持っており、それを持ち込んで診察に来るというスタイルだったので、日本であるような色々な病院で複数回画像をとるといった事はなく合理的だと思いました。

火曜日と木曜日の手術日は朝の7時から2つの手術室を交互に使う形で1日8件前後の手術をこなされていました。セッティングは全てコメディカル任せであり、執刀のタイミングで医師が参加する形でした。Latarjetに関してはNeyton先生がきっちりと肩甲骨の位置を確認し、執刀医の立つ位置が重要だと何回も教えてくれました。Latarjetに関しては毎回全く同じ手技を繰り返されていて、術野も本当にきれいで出血のなさに驚き

ました。またLatarjet後のフェイラーに対する腸骨を用いた骨移植術も何度もみせていただきましたし、後方不安定性に対する骨移植術も2回みる事ができました。一方で、日本ではおなじみのバンカート修復術は1度も見ることはありませんでした。日本であればバンカートで治す反復性脱臼にたいしてもLatarjetをされており手術適応が異なる事を知りました。

リバース型人工肩関節置換術もたくさん見る事ができました。全例3D術前プランニングソフトでシミュレーションされ、全例PSIが使われていました。一番驚いた事は、脱臼整復のトライアルをしない事でした。上腕骨は常に解剖頸で骨切りされていたのですが、実際のインプラントを挿入されてからも整復できない事はなく、骨切りを追加することが一度もなかったのが不思議でなりません。手術をみていて思った事ですが、やはり骨格が日本人と大きく違います。現在日本で使用できるインプラントは国産ではありません。すべて欧米人の骨格をもとにつくられているので、どうしてもサイズの小さな日本人にはフィットしていないという事を肌で感じました。やはりこの先日本人をはじめとするアジア人向けのインプラントを開発すべきだと強く思いました。

Lyonでの研修中にはみやぎ県南中核病院の金澤憲治先生と東京医科歯科大学の植木博子先生との交流を持つことができ非常に有意義な時間を過ごすことができました。金澤先生とはスイスまでレンタカーでの小旅行をすることもでき、忘れられない思い出ができました。金澤先生とは年齢が近い事もあり、レンタカーで懐メロ(Chage and askaなど)を聴きながら高速道路を走り、当時流行った話などで盛り上がった事を思い出します。

また、大阪でお世話になりフランス留学の大先輩である豊中市立病院の水野直子先生も長期休暇でフランスにいられており、一緒にワイン畑を見に行ったり、家族と一緒に水野先生のフランス人の旦那様の故郷に旅行してご実家に招待などしていただきました。旦那様はもともと旅行のプランニングを仕事にされていたので、完璧なスケジュールの旅行を楽しむ事ができました。大溪谷での経験など水野先生の援助なしでは体験することはできませんでした。水野先生ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

Lyonでの研修の最後に研究者ビザが取れる段取りがつき、6月末に日本に一時帰国することになりました。

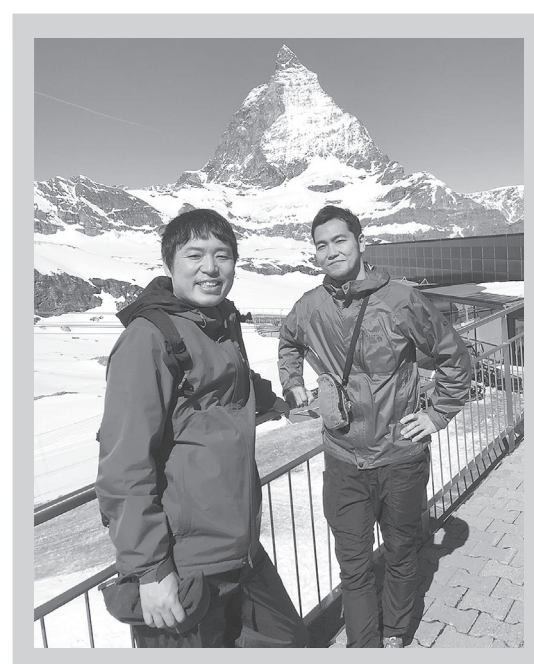
しかし空港に向かうトラムの中で妻と娘が移民系の子どもたちに囲まれスリにあっけしき財布をとられてしまいました。日本では考えられない事ですので改めて注意が必要だと再確認しました。

## Rennesでの研修

日本に帰り無事フランス大使館で研究者ビザが発給され、7月に家族揃って再度渡仏し、RennesでのPhilippe Collin先生のもとでの研修が開始となりました。Collin先生はRennesの市内中心部の駅前に2LDKのアパートをお持ちで、その家をお借りする事ができました。勤務先の病院はそのアパートからバスで30分くらいのところで、バス通勤しておりました。Collin先生の1週間は月曜日1日オペ、火曜日の午後、木曜日の午前オペ、火曜日午前、水曜日午前外来、金曜日はパリで外来とオペという予定でした。オペは午前中に5件の関節鏡もしくはLatarjet、昼から人工関節2件という予定でほぼNeyton先生と同じ様に2つの手術室を使いながらの手術スケジュールの組み方でした。一番驚いたのは、午前中のオペは12時までには終わらないといけなシステムらしく、時間がすぎると罰金を払わないといけな



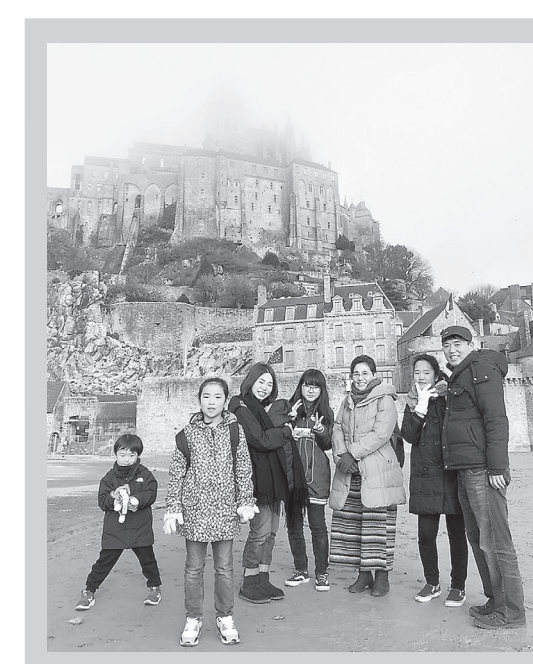
●Neyton先生とコロンビア人フェローと外来部屋での記念写真



●みやぎ県南中核病院の金澤先生とスイスのマッターホルン前で



●豊中市立病院の水野直子先生とロマネ・コンティのぶどう畑の前で記念写真



●わざわざ遠いフランスまで来てくれた母、妹、甥、姪、娘たちと一緒に霧のモン・サン・ミッシェルにて



いとこの事でした。手術手技的にもNeyton先生とほとんど同じでいけないとの事でした。Lyonでの研修と比較する事により理解が深まりました。Collin先生は我々にも刺入からある程度のところまで執刀させてくれたので非常に勉強になりました。特に私は側臥位の環境で育ったので、ビーチチェアでやらせてもらえるのは非常にありがたかったです。帰国してからはビーチと側臥位を状況によって使い分けております。また腱板修復に関しましてはindependent double rowという独自のやり方でされており、非常に勉強になりました。

Collin先生もNeyton先生と同じくLatarjet法はオープンでやるべきだという強い思いをお持ちの先生でしたので、私もLatarjet法はオープンでやるべきという思いを強くもつようになりました。Collin先生は日本人びいきな先生で、Latarjetの際はフクダレトラクターを使われていたのも印象的でした。

Collin先生はNeyton先生とは異なりリハビリを重視されているようで、リハビリスタッフと仲良く連携されて術後のフォローをされている様でした。また術後の評価に関してもリハビリスタッフの協力を得て可動域評価など電子カルテで上手に集計されていました。しかしいづれにしても日本ほど頻繁にリハビリに通う事はないようです。研修期間中の1カ月だけアメリカ人フェローが来ていて、その時にCollin先生が非常に熱くdiscussionされていたのが印象的でした。英語圏

の人間が国際的な場では自然と優位に立つのだなと心から思いました。

私の家族は妻と3姉妹でして、当時の学年は小学6年、5年、2年でした。現地で日本人の補習校に入り、週1回のコミュニティでのつてを頼り、なんとか現地の私立学校に3人まとめて入学する事ができました。娘たちは9月から12月まで4カ月間現地学校にフランス人と一緒に通いましたが、かなり大変だったみたいです。何回かお見送りとお迎えに行きましたが、言葉が話せないにも関わらず、楽しげに話しかけてくれる友達はいたみたいでフランス人の優しさを感じました。娘いわく日本ほど校則が厳しくないの、フランスの自由な感じがよかったとっておりました。ネイルをして学校に行くなどオシャレに目覚めていました。

Rennesでの滞在中は比較的時間があつた観光もたくさん行きました。特にモン・サン・ミッシェルは大のお気に入りでした。3回も行きました。その景色は雄大で、まさに神秘的で、心が震えるほど美しかったです。特に日本人が大好きな観光地ですので、毎回、たくさんの日本人がいました。他にはロワールの古城などもめぐりました。日本の城とはまったく雰囲気も異なりますが、歴史を感じる事ができて非常に良かったです。

ヨーロッパは緯度が高いため、秋から冬になると日照時間が極端に短くなります。朝9時頃に夜が明ける

ため、子供が学校に通う時間帯は真っ暗でした。寒さはほどほどでしたが、家はセントラルヒーティングがしっかりしているため24時間暖房つけっぱなしで、すごく快適でした。しかし、真冬に一度セントラルヒーティングが壊れて、夜に暖房が止まった時は家で凍え死ぬかと思いました。次の日に配管工の人が来てくれて直してくれた時は本当に嬉しかったです。これも今となってはいい思い出です。夏の留学と冬の留学では、本当に気分がまるで違いますので、半年、3カ月の留学なら迷わずトップシーズンを選ぶべきです。トップシーズン中はたくさん観光に行けましたが、オフシーズンはずっと家に引きこもっていました。しかしクリスマスには家の近くにクリスマスマーケットと移動遊園地が開催されて、買い物など楽しむ事ができました。

## さいごに

私がこの留学で得たものは色々ありましたが、やはり肩領域を勉強している医師として、聖地とも言えるフランスで肩の手術を勉強できたことは何よりの財産となりました。約1年フランスにいたので、診療スタイルや1年を通した働き方、ライフスタイルを知ることができて良かったです。日本人の働き方の方が確実にハードであり、無駄な仕事が多い様に思いました。フランスのやり方ももちろん欠点はあるのですが、可能であればフランス流の合理的なやり方を少しずつ取り入れてオリジナルなものを作り上げていきたいです。

気候的には、4月から6月くらいが一番よく快適な時を過ごせました。フランスの先生方は春と秋に2週間ずつ、夏に1カ月の休みをしっかりとられており、しっかりバカンスを満喫されていたのが印象的でした。日本人の我々もぜひとも見習いたいものです。

手技的な面では、帰国後はじめたLatarjet法と鏡視下腱板修復法であるMontgolfier double-row knotless法はフランス人の先生のお作法が頭に完全にインプットされているので、フランス留学の財産として大切にしていきたいです。

語学面では、お世話になった先生方は常に世界中からフェローを受け入れているので、会話は常に英語でした。振り返ってみるとがんばったフランス語は全然通じませんでしたし、役にたちませんでした。そんな

にあまくありませんね。フランス語をがんばるならその分英語をがんばった方がよかったとも思いましたが、せっかく始めたフランス語なので、今も日々少しずつ勉強を続けております。いつか現地でお世話になった先生方とフランス語ですらすらしゃべれる日を夢見て。

生活面では、フランス留学についてきてくれた妻と子供3人に感謝したいと思います。特に子どもたちは、フランス語も英語も全くしゃべれないのにも関わらず現地学校で不登校にもならずよくがんばってくれました。今はあまりよくない思い出かもしれませんが、いつか将来この経験が子どもたち自身にプラスになってくれる事を願っています。

食事面では、フランスパン、ハム、チーズ、ワインにどっぷりはまり食べまくり飲みまくりました。また近くのマルシェで生牡蠣も堪能しました。噂通りこれらはフランスの方が圧倒的に優れており楽しめました。

帰国後はコロナのせいでフランス留学の話を人にする機会に恵まれず、しばらく封印されていた思いがこの留学記を書きながら、またふつふつと蘇ってきました。コロナが収まれば是非色々な人たちにこの感動を直接伝えたいものです。

最後になりましたが、この様な貴重な留学の機会を与えて下さいました日仏整形外科学会の役員の方、大阪市立大学整形外科学教室の中村博亮教授をはじめ同門の先生方、またお力添えいただきました多くの先生方にあらためて厚く御礼申し上げます。この経験を日々の臨床に還元していく所存ですので、今後ともよろしく願い申し上げます。



●冬のフランス関節鏡学会でゲストにいられた東北大学・井樋教授とCollin先生と記念写真



●仲良くなったフランス人オペ場看護師とマレーシア人フェローと



## Marcel Kerboull先生を偲んで

学研都市病院整形外科人工関節センター 田中千晶

日本の人工股関節手術の進歩に貢献されたProfesseur Marcel Kerboull(写真1)が2020年1月7日に逝去されました。このフランスの偉大な整形外科医のご逝去に心から哀悼の意を捧げます。

Marcel Kerboull先生は1934年にBretagne地方のLannilisにお生まれで、数学好きの青年期を過ごされました。進学前の休暇中にたまたま列車で乗り合わせた中学時代の友人が医学部へ進学すると知って、結局医学部に進学されました。Angers次いでParisで医学を勉強され、1965年から1967年までParisのCochin病院のProfesseur Merle d'Aubigné教室でChef de Clinique-Assistantを勤められました。1982年にCochinの整形外科(Service B)の教授となり、1989年から1999年まで同院のService A主任教授として人工股関節手術を中心に国際的に活躍され、多くの股関節外科医を育てられました。日本においても私を含め多くの股関節外科医の恩人です。



●写真1 Marcel Kerboull教授

人工股関節の分野ではBiomechanicalな見地からデザインされたCMK人工股関節の開発やとりわけ股臼再建十字プレートと同種骨による股臼再建術は有名です。同種骨によるDouble femur techniqueやline-to-lineのImpaction Bone Graftingなど再置換術の革新的な手術手技を確立され、高位脱臼など困難症例のTHAに極めて良好な長期成績を残してこられたことは周知の事実です。日本の人工股関節手術において多大な貢献をされました。また息子で私の友人であるLuc Kerboullがその後継者として活躍していることは有名で、Kerboull親子ともに親日家で多くの弟子や友人がいます。

私事になりますが、私が山室隆夫教授の勧めでフランスへ留学したのは1988年の秋でした。フランス政府の給費とCollège de Médecine des Hôpitaux de Paris(当時はJacques Chiracが主催者)の給費に応募して運良く両者とも受かりましたが、フランスからの2つの給費を同時に受けることは出来ないとフランス大使館で言われ、給費額の高い後者を選びました。後者の給費は政府の給費留学生の倍額の給費でしたが、Duparc教授のBichat病院でInterneの仕事をするのが条件でした。患者を持ち、週1回の当直もdutyで大変でした。最初の1年近くはつらい毎日でしたが、苦勞する中でフランス語も何とか使えるようになり、多くの友人も出来、フランスの文化も少しずつ理解出来るようになりました。留学当初はMarcel Kerboull教授の名前すら存じ上げませんでしたが、人工股関節再置換術の勉強をするうちにKerboull教授の十字プレートを知るようになりました。Bichat病院の後にKerboull教授のいるCochin病院で何とか勉強したいと思いました。Kerboull教授とは面識が無かったので、わざわざ教授の講義を受講して下手なフランス語で質問をしました。そのときの教授は「なんだこの東洋人は」といった顔つきでした。質問の内容も教授の返答も記憶にありません。講義の後で来期は先生の教室で勉強したいとお話しました。Kerboull教授は「良いけれども給費は出せない」と言

われました。熱烈歓迎とは言えないながらも明日が開けたと思いました。上原財団の留学給費も頂いていたので何とかなと思っていました。急いで山室教授にお願いして推薦状を書いて頂きましたが、Duparc教授にはとても推薦状を書いてほしいとは言えませんでした。と言いますのはDuparc教授とKerboull教授は犬猿の仲だったからです。しかし勇気を振り絞ってCochin病院に行きたいとDuparc教授にお話ししたところ当時Service Aの主任教授であったPostel教授に紹介状を書いてくださいました。Kerboull教授はService Bの教授でしたので、希望通りでは無いにしてもまだ勉強する機会はあるだろうと期待しましてPostel教授に手紙を書きました。Postel教授から「今期で退職するのでKerboull教授のところで勉強しなさい」という願っても無い返事を頂きました。そのとき何かしら運命を感じました。こうして私はService AのKerboull主任教授の最初の外国人留学生となりました。

私のCochin病院での生活はKerboull教授の週2回の外来と週3回の手術に付くことでした。空いた時間はKerboull教授の高位脱臼症例の長期成績を調べてMémoire(論文)に費やしました。そのMémoireでUniversité Paris V-René DescartesからAssistant Étrangerの称号を得ました。

Kerboull教授の教室はMerle d'Aubigné学派の気風を受け継いでいました。すべて整然とorganizeされて、遅刻する者もいません。術前staff meetingでは患者が呼ばれて診察されて、治療方針が決定されます。Kerboull教授の的確な結論がカルテに朱色でtypeされます。Kerboull教授は仕事に厳格な先生で、とりわけ手術中は無言で張り詰めた緊張感が漂っていました。誰もしゃべりません。たまに私が質問しても無言で、大分たってから返事が返ってくるといった具合です。良い質問には丁寧に説明してくださいました。教授の教育者としての信念は懇切丁寧に教えることでは無いように思えました。どんなに詳しく説明しても解らな

いは理解しないし、優秀な者は説明無しでも観ているだけで自然に理解するといった具合です。後にZurich大学で肩関節の大教授になったChristian Gerberは若い頃にKerboullの教室で働いていた時のことを後年SOFOTに招かれて来たときの昼食の席で語ったことがあります。Kerboull教授の手術の終わりに創の両端から教授と若きGerberが閉創していくと、教授は無言でGerberの縫合糸を次々と全部切って縫い直しました。若きGerberは教授にどうしたら上手く皮膚が縫えるか尋ねました。教授は「私のやるようにしなさい」と答えただけでした。これがKerboull教授の教育でした。帰国直前に「帰国してから困った症例があったら相談にのってくれますか？」と尋ねる私に「よろしい。しかし、もし君が十分にintelligentであれば自然に一人で解決法を見出すであろう」と教授は答えられました。彼自身そうやって解決してきたからでしょう。教授は自分の仕事に自信を持っているからでしょうが、私がCochin病院にいた1年余りの間に短期間ずつ色々な病院を見学することを快諾してくれました。御蔭でHenri Dejour教授(Lyon)、Louis教授とGroulier教授(Marseille)、Endoklinik(Hamburg, ドイツ)、Charles Engh先生(Arlington, US)を訪問できました。Kerboull先生は米国に行くならColumbia大学のSalvati教授に紹介状を書くと言ってくれましたが、訪問する余裕がありませんでした。

Kerboull教授は自ら数学が得意であったと言っておられたように、mechanicalなセンスにも優れ、CMKのデザインに現れています。骨セメントになるべく負担を掛けない合理的な形状のステムデザインを考えられました。その合理性はKerboull十字プレートにも現れていると思います。

術者としてのKerboull教授は完璧主義者でした。現役教授時代には意図的にそうしていたと後年語っておられましたが、すべての再置換術はたとえ臼蓋側の弛みだけであって、ステムの弛みが無くともすべて再置



換されました。当時はMonoblocのステムが多く、骨頭表面の凹凸が摩耗の原因になっているかもしれないからという理由もありました。ある日、Bousquetのねじ込み式セメントレスシステム症例の臼蓋側弛みの再置換手術で、ねじ込み式ステムの弛みは全くありませんでしたが、教授は臼蓋を再建後に大腿骨を長軸に5-6枚に縦割してステムを抜去してロングステムで上手に再建されました。常人の成せる技ではありませんでした。そのとき私は自分にはとても出来ないと思い、今後抜去不能の人工関節を入れることは罪悪であると思いました。

教授はPrimary THAにも臼蓋リーマーを使わずにSmith-Petersenの鑿だけで上手に形成されました。術後に「フランスでは未だにリーマーが無く鑿で臼蓋を穿っていたと日本に帰国してから君は話すだろう」と冗談で私に語っておられました。本心は鑿の方が自分の思い通りになることと自身のトレーニングであると語っておられました。ある日の術前meetingの後に業者がリーマーの宣伝に来ました。当時鑿だけで臼蓋を形成していたのはKerboull教授をはじめごく少数で、多くのスタッフは内緒でリーマーを使っていました。

教授はスタッフ全員に向かって「誰かリーマーを使っている人はいるか？」と尋ねましたが、正直に手を挙げたのがTomeno教授一人でした。臼蓋の骨移植も過不足無くぴったりと形成されたのが印象的でした。後年京都に来られたときに著名な陶芸家の窯を案内したときのことを思い出します。陶芸家が急須の作成を実演してくれました。本体と蓋と別々に手作りするのですが、ぴったり嵌まるのを見てKerboull教授は大変感心されました。Artistとして共通するものを感じたのでしょう。ある整形外科教授が日本の学会でKerboull教授の発表を聞いて「あれは大工だね」と軽蔑的に私に語ったことがあります。私は内心憤りを覚えました。Kerboull教授はScientistでありArtistでした。患者にとって最も良い治療を提供できるのはScientist-Artistの整形外科医であると私は確信しています。自らScientistを誇っているその整形外科教授が果たして患者に最高の治療をしているのか私は知りません。

Marcel Kerboull先生は3度京都に来られました。一度は高位脱臼患者の手術で私を手伝って下さり、大変光栄なことでした(写真2 術後にスタッフと撮影)。私には宝物があります。一つは帰国の際に先生が贈っ

て下さった股臼形成のための鑿で、私の名前を刻んだSmith-Petersenの鑿セットです(写真3)。THAの時には必ず使っています。もう一つは私が整形外科部長になったときに贈って下さったLivre d'Or(金色に縁取りされた皮張りの記帳録)です(写真4)。最初のページにKerboull先生が私のことをMon fils spirituel(精神的な息子、愛弟子)と書いて下さいましたことに心を打たれました。残念なのは私には鑿だけで股臼を形成する技量は無いことです。最後にリーマーを使いながらつぶやくのです。「ごめんなさいMon père spirituel」と。

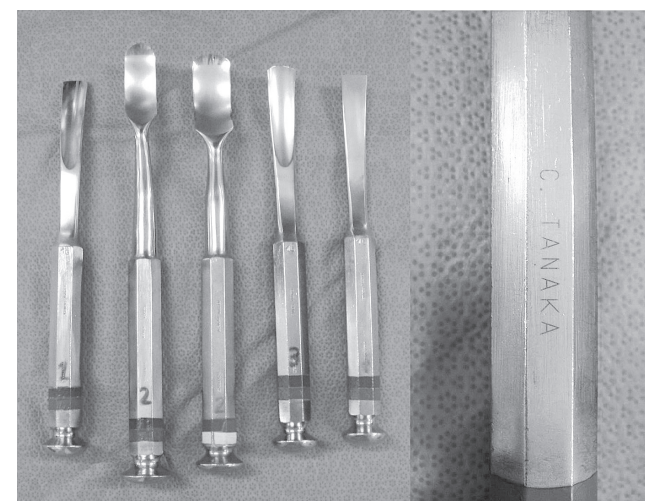
フランスの整形外科Interneの多くは限られた地域で勉強して整形外科医となり、多くの偉大な教授の手術

を実際に見ること無く、開業して手術を続けます。今はInternetで手術を勉強することは容易になったかもしれませんが、原則的には自分の地域外の教室に短期でも留学できるのは同期に一人、メダル受賞者ぐらいです。その点で日本の若い整形外科医は日仏整形外科学会の留学制度の御蔭でフランスの有名な教授の下に何か所も臨床の勉強に行く機会があり、大変恵まれています。私は幸いにも2年半あまりの留学中にKerboull教授、Duparc教授、Alnot教授、Dejour教授、Roy-Camille教授、Saillant教授、Louis教授、Groulier教授、BernのMueller教授、Ganz教授、ドイツのEndoklinik、米国のCharles Engh先生など多くの著名な教授から勉強する機会を得ました。今後留学される先生方に幾つかアドバイスしたいことがあります。一つは勉強の目的をしっかりと定めて予め先方の業績を勉強していくこと、二つ目は手術の鮮やかさやテクニックは勉強になりますが、それと同等もしくはそれ以上に外来に付いて学ぶことが重要であると思います。手術の結果は外来に反映されますし、如何に患者さんに接して診察しているかはその先生の人間性を表わし、大変勉強になります。本質を学んで帰国後の歩むべき道を定め、診療に役立てて頂きたいと思います。

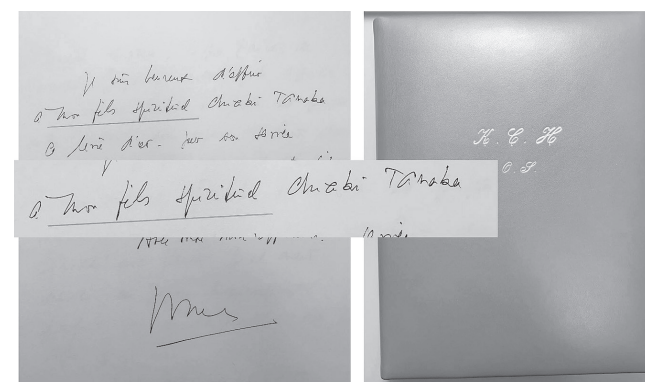
最後にもう一度、心からMarcel Kerboull先生に限りない感謝の気持ちと深い哀悼の意を捧げます。



●写真2 術後にスタッフと撮影



●写真3 M. Kerboull先生から頂いた鑿



●写真4 Livre d'Or



# Marcel Kerboull 先生の訃報によせて

横浜南共済病院整形外科 柘原俊久

このたびMarcel Kerboull先生の訃報に接し、先生との本当にわずかな接点を思い出し、謹んでお悔やみを述べさせていただきます。

私は、本学会の交換研修を足掛かりに2003年から2年間のフランス留学のチャンスをいただき、その半分以上をパリのCochin病院で学びました。この間、Cochin病院に兼任講師でいらしていたLuc Kerboull先生に声を掛けていただき、Luc先生がお勤めの市内のプライベートクリニックでたびたび手術見学に入らせていただいていた。そんなある日、「君は親父(Marcel先生)の手術を見たことがある？ 今日、父が執刀するレビジョンがあるけれど、入っていくかい？」と突然Luc先生からお話があり、こんなチャンスを逃すものかと強くお願いし、第二助手で入れていただきました。Marcel先生専属の手術看護師さんからは術前に、「ムッシュー、絶対に勝手に手を出さないように、我々が先生に怒られますから。」と念を押され、開発者である巨匠執刀の“Kerboull deviceでの再置換”を手洗いして間近で見学するという幸運に恵まれました。

他院で行われたセメントレスカップが原臼からかなり高位に設置されたものの早期に固定性を失い、緩んだセメントレスカップが寛骨臼母床を一層破壊している状態が見て取れました。術中に先生は、安易に高位設置を許容したセメントレスカップの手術手技を強い口調で非難されてはいましたが、同種骨を用いたKerboull deviceでの寛骨臼再建を粛々と完遂され、一服されてレントゲンを確認し、風のように手術室を後にされました。残念ながら、緊張のあまり一つの質問もできなかったと記憶していますが、その日の私の手術記録には先生の手技に感動した様子が綿々と記されています。

その後も、Luc先生からお誘いをいただき参加したKerboull Forumなどで数回お会いしました。写真はその時のレセプションでの1枚と思われます。

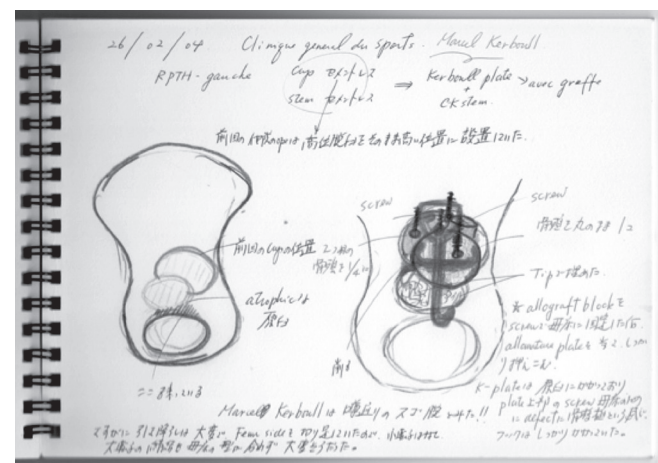
周知の通り、Kerboull deviceは愛弟子である田中千晶先生により我が国に導入され、今や多くの施設で使用されています。多くの先生が学会場でこのデバイスを語られているのを耳にしますが、「私は本家の手術に実際に入った。」という1点が今も私の自慢であり、フランス留学の貴重な成果だと自負しています。

その後もCochin病院で、Marcel先生が現役時代に初回手術を執刀され、先生の後継者であるJean-Pierre Courpied先生、Michel Matieu先生、Laurant Vastel先生達が執刀された再置換を見る機会にも恵まれました。

初回手術から20年ほど経過した再置換でも術野の深層にもほぼ全く癒痕形成が見られず、大転子を落とすことで臀筋の温存を図るtranstrochanteric approachの妙味を実感させていただきました。先生が執筆された“Arthroplastie totale de hanche”は原著を全文コピーしてSOFCOTの抄録作成に活かし、今も手元にあります。

帰国後私は先生方からの薫陶を胸に、セメント・セメントレスの違いはあれど安易な高位設置を許容せず、カップの原臼位設置に拘ったTHAを今もずっと続けております。

ありがとうございました。遠い日本より、先生のご冥福をお祈り申し上げます。



●手術当日の私のスケッチです。先生の手際に感動し興奮が冷めやらぬようで、“噂通りの凄腕”などと生意気なことが書いてありました、お恥ずかしい限りです。



●2006年SOFCOTの抄録は、この本から専門用語を引き出して書き上げました。今も私のバイブルです。





# How to become an orthopedic surgeon in France

Dr KISHI Takaakira  
Contact: takaparis@gmail.com

## フランスの岸 孝章先生を紹介します

この度、岸孝章(KISHI Takaakira)先生が日仏整形外科学会の新幹事に任命されましたので、ご紹介いたします。彼は両親が日本人ですが、フランスで生まれ育ち、フランスの医学部を卒業し、フランスで整形外科医として勤務しています。岸先生と私は、フランス・パリのAP-HP. Hôpitaux Universitaires Henri MondorでInterneとして共に過ごしました。彼の人柄がよくわかるエピソードを一つ紹介します。当時の当直表(図1)にあるように、月の当直数は私が6回と最多になっています。実は、私のような外国人研修医(Faisant fonction d'interne:FFI)は、なんだかんだで当直数がフランス人Internより多くなるのです。しかしある日、Interne同士で当直を決める時に岸先生が「いつもヒロばかりに当直を押し付けるのは良くない!」と私を守ってくれたのを今でも覚えています。ちなみに、フランス映画「HIPPOCRATE (邦題名:ヒポクラテスの子供達)」は、パリのInterne文化を見事にそのまま映し出した医療映画として有名ですが、この映画の中にも、FFIがクリスマスの当直を押し付けられるシーンがありまして、この映画を見るたびに、私はニンマリとしながら岸先生を思い出します。

そんな岸先生は、非常にフレンドリーな性格で、母国語であるフランス語はもちろんですが日本語も話せます。彼は日仏整形の学問・文化交流のキーパーソンであることに間違いありません。岸孝章先生の幹事就任により、日仏整形外科学会の益々の発展、そして日仏整形外科医同士の更なる交流が強く約束されたものと確信しております。Bienvenue, Taka! Merci beaucoup, Taka!

さて今回、岸先生から特別寄稿をいただいております。彼の半生、日本人整形外科医との繋がり、そして彼が我々日本人との繋がりをとても大事に思っていることがよくわかります。また、non-EUドクターがフランスで外科医をするための方法もまとめていた

だき、非常に貴重な文章となっておりますので、どうぞ、お楽しみください。そして、学会等で彼を見かけた際には、ぜひBonjour Taka!とお声をかけてみてください。彼の人の良さが直ぐにわかるはずですよ。それでは。  
(順天堂大学 整形外科 本間康弘)

GARDE INTERNE 2011			
DATE	GARDE	ASTREINTE	
MAI	NOM		
2011/5/2	FONTANAROSA		
2011/5/3	BOUHOU		
2011/5/4	DUPUY		
2011/5/5	PARIAT		
2011/5/6	FONTANAROSA		DU Hiro
2011/5/7	MAS	KISHI	
2011/5/8	FONTANAROSA		
2011/5/9	PARIAT		Cours(matin) Hiro
2011/5/10	HOMMA		
2011/5/11	MAS		Cours(matin) Hiro
2011/5/12	KISHI		
2011/5/13	DUPUY		DU Hiro
2011/5/14	HOMMA	PARIAT	
2011/5/15	DUPUY		
2011/5/16	PARIAT		Cours(matin) Hiro
2011/5/17	KISHI		
2011/5/18	HOMMA		
2011/5/19	DUPUY		
2011/5/20	MAS		
2011/5/21	KISHI	FONTANAROSA	CONGE
2011/5/22	MAS		PATERNITE
2011/5/23	FONTANAROSA		DUPUY
2011/5/24	HOMMA		
2011/5/25	MAS		
2011/5/26	KISHI		
2011/5/27	PARIAT		
2011/5/28	HOMMA	FONTANAROSA	
2011/5/29	PARIAT		
2011/5/30	HOMMA		
2011/5/31	DUPUY		

●図1

According to the World Health Organization, France had in 2000 the best health care system. In 2017, its ranking was downgraded to 10th place. Many factors can explain this. One of these is the lack of doctors. Has respond to this, France gives access more easily in a medical position to non-French doctors. Here are some clues for becoming an orthopedic surgeon in France, illustrated by my own experience.

My name is KISHI Takaakira. I am a Japanese French-born orthopedic surgeon in Paris. I was born in Paris, France in 1977, to Japanese parents.

My school path is an almost common French path. I have been in public schools for primary and high school. I did my middle school in a private school. I graduated high school after succeeding the « Baccalauréat » exam commonly called “Bac”. I could then register in Paris 5 René Descartes University for the first year of medicine.

I attended Necker hospital. Then Cochin hospital and European Georges Pompidou hospital as well. All the

faculties are public in France and the average price for one year is 1000 euros. At the time, there was the numerus clausus, limiting the number of students to the second year at 8%. There is no more numerus clausus. People have to register to the “parcours d'accès spécifique santé” (PASS) for the first year of medicine. At the end of the first year, your results are submitted to a jury for access to the second year. For non-European medical students, from 2021, you can ask equivalence from your country and access directly the equivalent level to your country.

At the end of the general medical studies (6 years), I passed another numerus clausus called “Examen Classant National” (ECN) which sets your national ranking and then your order for choosing your speciality and your city: the higher you are, the earlier you choose. Each city and each speciality have a limited number of seats. The most wanted seats are Paris and Marseille. The firstly chosen specialities are the higher incomes such as radiology, dermatology, anesthesiology, and surgery.



●Photo 1 Pr Hanoun



●Photo 2 Pr Hanoun's team with Pr Vaillant the actual boss.



My ranking allowed me to choose surgery in Paris, where you do 2 years of general surgery then specialize. Actually, you have to choose at the beginning of your residency the speciality of your surgery.

My last 3 month as a medical student was spent in orthopedic surgery service at Cochin hospital: I discovered ortho-oncology and 9 operating rooms dedicated to orthopedic surgery. This experience decides me to do surgery.

You have 5 years of residency, with a turnover of 6 months in each service you choose: this is called a

“stage”. Every 6 month, all the resident has to choose the service you go from the elder to the younger. In one promotion, ECN ranking determines the order: higher-ranking choose first. You can choose to work in another speciality than your speciality, but it has to fulfil the number of the stage in the speciality you have to do, decided by the faculty.

That is why my first “stage” was hepatic transplantation in Pitié Salpêtrière university hospital where I learned soft tissue surgery with Professor Hanoun and his team. (photo 1-2)

One downtown “stage” had to be done during my time and I did it as my second one in the north of Paris, Seine Saint Denis, which is one of the poorest but highly interesting areas: this is a place where people really need care. I discovered a new world surrounding Paris: illegal camps to stab and gun wound.

In this region, a world-famous surgeon was practising: Professor Masquelet in Avicenne university hospital (photo 3-4-4bis-5). He was attracted to that place because cases were always very heavy and he had to manage very severe cases with bone and soft tissue defect. That was my third “stage”. I decided to follow Pr Masquelet's teaching and become an orthopedic surgeon. I understood that he studied anatomy a lot at the Parisian Fer à moulin cadaver lab where you can easily access anatomical fresh subjects to sharpen your skills: even now you can see Professor Masquelet dissecting subject! It is an amazing place: you can order anatomical subjects the day before!

To validate the orthopedic surgeon degree, you have to present a medical thesis specialized in surgery, “diplome d'étude spécialisé complémentaire” (DESC). You need to choose a theme with a director. Professor Masquelet asked me to retrieve patients for a long term follow up after induced membrane technic (up to 22 years). This work took me 2 years.

In the layout for becoming an orthopedic surgeon, 6 months have to be done in an orthopediatric service which I did in Trousseau hospital where I met the youngest orthopedic surgery head chief: Professor Vialle who is one of the most prolific publishers of orthopedic referenced articles. But the most amazing article writer I have met during my residency is Professor Hernigou at Henri Mondor hospital with his Punction Concentration Reinjection (PCR) concept: concentrating stem cells from autologous bone marrow, and inject them into osteonecrosed bone. (photo 6 and 6bis) During my stage at this place, I have met a young Japanese orthopedic surgeon who became a friend: Doctor and later Professor Honma. Ten years later he will ask me to write this article. Thanks to him because he introduced me to Professor Kaneko from the Juntendo University. Every time he was in France, he introduces me to many Japanese doctors with whom I could exchange a lot: Professor Oe, Doctor Shiota, Doctor Naito. These gentlemen introduced me to the Japanese orthopedic surgery world and friendship. Professor Kaneko's love for France and rugby made us close. (photo 7-8-9-10-11-11bis-11ter-11'-11'")

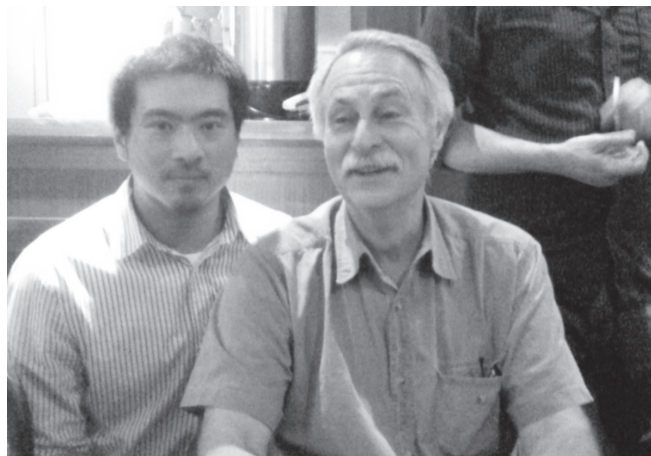
As I meet surgeons from other countries, I could notice that in France, we are very quickly given responsibilities which always attract many surgeons from countries where surgeons could not even approach the operating



●Photo 3 Last staff meeting with Pr Masquelet



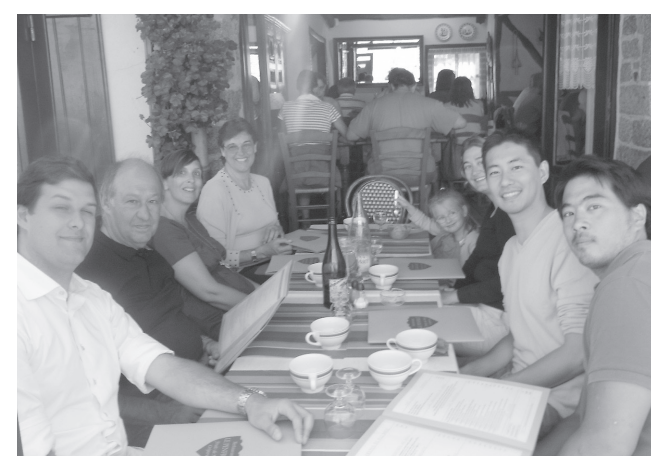
●Photo 4 bis Pr Masquelet in Japan in a Kobe beef restaurant



●Photo 4 Pr Masquelet a great surgeon but mainly a great man



●Photo 5 Staff reunion with Pr Masquelet



●Photo 6 Pr Hernigou, his family, Pr Honma



●Photo 6 bis Pr Hernigou's place



room. There is a rule beyond surgeons: to let the residents do the surgery under the senior surgeon's supervision during on-call surgery.

During residency, you have to cumulate educational points by attending congresses, publishing, doing laboratory research or validating some diplomas to refine some specialisation in orthopedic (anatomy, lower limb, upper limb, spine, arthroscopy).

During the anatomy diploma, I had a lesson about wrist anatomy: the pedagogy and the intelligence of the teaching were illuminating! The teacher was even waking

students who were falling asleep due to a hard on-call night. The teacher was Professor Oberlin. I decided to learn upper limb surgery with him and register for his hand surgery diplomas. His commitment to sharing his knowledge is amazing: he shared all the things on his hard drive and was very meticulously doing surgical technic videos. More than surgery, he teaches you a working method. I followed him for a humanitarian mission and could also see his political commitment as well. After graduating from residency, he asked me to be an assistant teacher for his upper limb diploma, which I did until his retirement. I understood the difficulty to teach and how big his knowledge was. (photo 12)

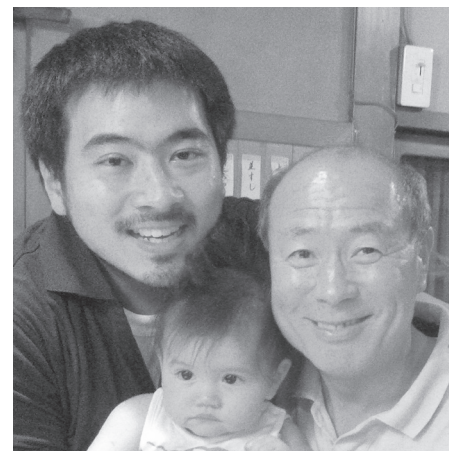
During my residency, I noticed the international recognition for French shoulder surgeons like Doctor Latarjet, Trillat, Patte, Walch and most recently Lafosse. After attending to Docteur Lafosse course, he told me that his master in surgery is Professor Oberlin! I was pleased to have very interesting talks with many world-famous European shoulder surgeons but also with Professor Itoi who is very present with his team in many European congresses. His love of occidental culture makes him visit many times France and every time we had very interesting talks and I could understand many interesting concepts about the shoulder. His ability to conceptualise the shoulder is a model to me. (Photo 12bis)

My last year of residency focused on the upper limb and especially on the wrist with Docteur Mathoulin and shoulder with Docteur Lafosse's arthroscopist. During the EWAS training in France, I have met Professor Nakamura who welcomed me to his hospital for 2 summers: his knowledge and technics changed my way to perform wrist arthroscopy. His love of French wine made us spend long talks along glasses! (photo 12ter).

Arthroscopy attracted me for its very demanding technics. But I never saw arthroscopic Bankart during my time in public hospitals: indeed in France, 90% of shoulder instability are treated by open Latarjet and



●Photo 7 Pr Honma in Brittany



●Photo 9 Pr Kaneko and my daughter



●Photo 11 Pr Oe



●Photo 11 ter Dr Naito et Dr Shiota



●Photo 8 myself on a journey with Pr Honma taking the picture



●Photo 10 Pr Kaneko in Juntendo Hospital



●Photo 11 bis Pr Kaneko and Pr Honma



●Photo 11' Dr Naito's family



mostly by non-shoulder surgeons. I then attended a private clinic for validating my arthroscopic diploma with the first French surgeon who performed arthroscopic Bankart in France: Docteur Iserin. He studied arthroscopic Bankart along with Doctor Eugene Wolf in San Francisco who studied medicine in France. I understood the main reason arthroscopic Bankart is more commonly performed in USA: baseball. It is barely played in France. Rugby and contact sport athletes have more commonly shoulder dislocation in France which favours Latarjet indication. Another important teaching was also along Doctor Grimberg who help me to improve my arthroscopic Latarjet by guiding me in the operating

room after freeing some time on his usual working time! He is also a major tendon transfer operator and he taught me the Latissimus dorsi transfer. (photo 13)

During one shoulder French congress, I met Doctor Sugaya who welcomed me many times in his service in Funabashi. I could see how different can be the thinking of the shoulder for someone who has to manage throwing athletes. Thanks to his generosity and his time to answer all my numerous questions as well as all his team especially Doctor Takahashi who spent lots of time to explaining to me the details of their technics. I definitively understood that the main point to get good

results in shoulder surgery and in surgery, in general, is the indication: as Professor Masquelet always repeats to me “even a monkey can perform a surgery: to do is one thing, to know is another thing, but the thing is to know what to do”. I could see Doctor Sugaya during counselling, personally doing the physical examination, for each one of his patients. I could see also the dynamic of his publishing hunger that requires a huge ability to manage and unify people around him. His aim is to relay his knowledge by teaching adapted to each young surgeon's speed: that creates a very peaceful working dynamic without bullying and terrifying young surgeon. Some of them became good friends like Dr. Hamada (photo 14-15-16).

After graduating from my residency, getting my diplomas and specialized in orthopedic surgery, I did 3 years of senior surgeon in Avicenne hospital. I could then perform as an independent surgeon in both private and public hospitals. The main difference between France and Japan is that in French private structures you are paid for each surgery you perform, opposed to a public hospital, where you get a salary for a determined time. Most of the surgeons go to a private structure due to better income. Working in a public structure has many advantages: you don't have the income result pressure, you can justify

using more developed places because they have an obligation to spend budget money. Also, material demanding surgeries are more easily done in public structures especially when you need allograft.

After 3 years in public and private structure, I understood that many times, patients and doctors are not considered as central as they should be and that creates tension between administration and surgeons. I decided to open my cabinet, to let me focus on patients and not to be accountable to an administration. Also, in the last 2 years, I have learned Walant surgery with Doctor Croutzet in Toulouse, and after convincing my insurance that is the future, I can perform soft tissue surgery in my cabinet. I have learned as well the echography guided surgery. I perform Walant in my cabinet, as recommended by Doctor Lalond, because hospital and clinic hunger surgeon to perform acts in their structure to get money from the social security. For bigger surgery or bone involved surgery I just rent an operating room to a clinic where I don't do recruit counselling. The next step is to own a clinic, but regulation for opening a surgical place is strictly regulated in France. This is a common way to become an orthopedic surgeon in France.



●Photo 11'' my father Dr Shiota's family



●Photo 12 bis Pr Nakamura



●Photo 12 Dr Somsak on the left, Pr Oberlin in the middle.



●Photo 12 ter SECEC with Dr Naito left to Pr Itoi, the 3rd from the right is Dr Gerber and on his left Dr Hamada from Dr Sugaya's team



●Photo 13 Dr Sugaya, Dr Grimberg on his right



●Photo 14 Dr Sugaya with Arnaud Walch



For non-EU doctors, there are different ways to become a surgeon. You can access general medicine studies and apply for equivalence and pass the 6th year exam: there is no longer ranking at the 6th year. That applies to non-EU MD without specialization. If you are MD and specialized in surgery, you can be a resident in France as a “faisant fonction d'interne” FFI meaning “with a resident function” or associated intern: you have to ask directly to the head of an orthopedic service in France. You can as well get a diploma for your time as a resident in France and subscribe to Diplôme de Formation Médicale Spécialisée DFMS for non-specialized doctors and to Diplôme de Formation Médicale Spécialisée Approfondie DFMSA for already specialized doctor at Strasbourg University: seats are few in each speciality and these years are not recognised as residency if you want to be a doctor in France. This is for 2 years.

If you want to work in France as a non-EU independent surgeon, you have to pass the “épreuves de verification des connaissances” (EVC) which is an exam to test your medical knowledge. At the end you have a ranking that determines your position to choose your speciality. Each speciality has a limited number of seats. There are usually 200-300 non-EU candidates for 10 seats. The test is in French and has one theoretical part and one practical part. If you succeed the EVC, you have to perform 3-4

years as an assistant senior surgeon then submit your profile to a jury for being an independent surgeon. To better your profile, it is highly recommended to have many specialization universitarian diplomas. The EVC is managed by the “Centre National de Gestion” (CNG) which is the managing structure of the ministry of health. You can access on their website the old examination documents.

Usually, non-EU doctors do FFI 1-2 years to understand the system and study theory during 1-2 years and pass the EVC. Then you have to do your 3-4 years of assistant senior surgeon. You can find many information on the internet (see reference below) but be aware that many things changed in 2020 and 2021. This website summarises the best medical system for non-EU people: <https://www.residencydatabase.com/>.

Beyond countries and hospitals, my way to prepare and perform surgery was mainly shaped by the generosity and pedagogy of other surgeons. Here make sense notion of companionship.

Care and opening leads to great interaction. Thank you to all of those who are cited or not cited but who left a print in me. I hope to perpetuate this heritage.



●Photo 15 Dr Sugaya's conseling



●Photo 16 Dr Sugaya's in Funabashi operating room

#### 《Reference's》

- International Comparison Reflects Flaws and Opportunities for Better U.S. Health Care  
<https://www.who.int/healthinfo/paper30.pdf>
- <https://interactives.commonwealthfund.org/2017/july/mirror-mirror/>
- <https://u-paris.fr/en/welcoming-international-students/>
- <http://etudiant.aujourd'hui.fr/etudiant/info/medecine-l-as-ou-pass-comment-choisir.html>
- [https://etudiant.lefigaro.fr/article/la-premiere-annee-de-medecine-coutera-en-moyenne-5016-euros\\_03c932ca-aa97-11e8-af73-6caf6029776e/](https://etudiant.lefigaro.fr/article/la-premiere-annee-de-medecine-coutera-en-moyenne-5016-euros_03c932ca-aa97-11e8-af73-6caf6029776e/)
- <https://www.legifrance.gouv.fr/loda/id/JORFTEXT000039645846/2021-01-19/>
- Masquelet AC, Kishi T, Benko PE.  
Very long-term results of post-traumatic bone defect reconstruction by the induced membrane technique. Orthop Traumatol Surg Res. 2019 Feb;105(1):159-166. doi: 10.1016/j.otsr.2018.11.012. Epub 2019 Jan 11. PMID:30639175.
- <http://med.unistra.fr/fre/Formations/3eme-cycle/DFMS-DFMSA>
- <https://www.cng.sante.fr/concours-examens/epreuves-de-verification-connaissances-etc>

(コーディネーター：吉田ジェイソン)



## ワインエキスパート清の合格体験記 ~2020年7月から10月にかけての濃いめにソーヴィニオンな体験~

旭川荘療育・医療センター(岡山) 青木 清



### はじめに

皆さん、Bonjour!!

All of you know the 「ソムリエ」, however, how about the 「ワインエキスパート」?

私は、生まれてから約30年間ワインを飲む機会がほとんどなかった。しかし、1998年からフランス政府給費留学生として1年間生活した際に、少しずつワインを飲む機会が増えた。同時期に留学していた三重のDr.山川と一緒に、ポール・ボキューズなどの三ツ星レストランを多数チャレンジした。それぞれのお店のおすすめの白ワインと赤ワインを1本ずつ飲んだことが多かったが、その時には品種はほとんど分かっていなかった。

その後、Dr.山川がつないで下さった縁で、岡山県

の女性(Noriko)と2002年に結婚した時の引き出物は、「ブルゴーニュワイン+ブルゴーニュワイングラスペア」であった。帰国後、ピノ・ノワールの色彩&香りに魅了されていた私に、ボルドーワインの濃いめにソーヴィニオンな世界を教えてくれたのは、私の「deeply close friend」の2人である(写真1)。以後、私の人生におけるワインは、「赤」デミック・トーク(bien sur, academic talk!!!)が中心であった。

2020年6月に、私が「山内逸郎記念賞」という名誉ある賞をいただいた際に、Dr.岡が祝賀会を少人数で企画してくれた。2020年7月に、後にミシュランガイド岡山で星を獲得した「はすのみ(ヌーベルシノワ)」で「POUILLY FUME 2012(写真2)」というワインを飲んでも、それが香りに特徴のあるソーヴィニオン・ブランという品種であることをよく認識できていなかった。



●写真1 左から筆者、Dr.岡、Kazuo(藤原一夫)(2019年、あるワイン会にて)



●写真2 Sauvignon Blanc

そんな私が、「ワインエキスパート」という資格の存在を知り、2020年7月から10月にかけて集中して学び、そして合格した。本稿では、その軌跡、今まで経験したことのなかったワインのdeepな世界の一端、そして、その体験から感じた新しい「自分」や「生き方」を具体的に紹介したい。

### 【ワインエキスパートとは】

日本ソムリエ協会のホームページによると、ワインエキスパートについて以下のような説明がある。

<ワインエキスパート>

- ◆酒類、飲料、食全般の専門的知識、テイスティング能力を有する方
- ◆職種、経験は不問
- ◆ソムリエ職種に就かれていて、受験に必要な経験年数に満たない方

ソムリエとワインエキスパートの大きな違いは、飲食サービスなどでの勤務経験の有無である。

### 【受験のきっかけ】

前述の祝賀会で「ワインエキスパート」という資格があることを知ったが、いつも通り、その日のうちに記憶から抜けていた。一緒に話を聞いていたNorikoから、翌日に「今年は時間があるから受けてみたら!」と提案され、7月14日(締め切りの前日)に、申し込みをした。

### 【参考図書・サイト・映画】

- 1) 日本ソムリエ協会、2020日本ソムリエ協会 教本 J.S.A.ソムリエ J.S.A.ワインエキスパート(医師国家試験の「イヤernote」や昔の電話帳を彷彿させる750ページにもわたる超分厚い百科事典)
- 2) 杉山明日香、受験のプロに教わる **ソムリエ試験対策講座** ワイン地図帳付き<2020年度版>、Little More(「ポイント」「出題例」「Check & Repeat」などが最新情報をもとに大変分かりやすくまとめているおすすすめの1冊!)
- 3) 杉山明日香、受験のプロに教わる **ソムリエ試験対策問題集** ワイン地図帳付き<2020年度版>、Little More

- 4) ワインとグルメの資格と教室2020 過去問題集&合格テクニック、イカロス出版
- 5) ワインテイスティングの基礎知識 別冊/認定試験二次攻略テクニック、新星出版、2019
- 6) ビアンカ・ボスカ(小西敦子訳)、熱狂のソムリエを追い!ワインにとりつかれた人々との冒険、光文社、2018(普段本を読まない私が、2019年冬に倉敷の本屋さんでたまたま出会い一気読みし人生観を変えた衝撃本!生き方や外来診療にも良い影響を与えてくれる!)
- 7) Bianca Bosker, Cork Dork: A Wine-Fueled Adventure Among the Obsessive Sommeliers, Big Bottle Hunters, and Rogue Scientists Who Taught Me to Live for Taste(English Edition)、Penguin Books、2017(文献6の原本、訳本があまりにも面白かったので、ついつい購入した!)
- 8) **ワイン受験.com**(8月中旬に存在を知った、受験対策や問題集が充実しているので興味がある方はまずこのサイトにアクセスを!私は、山崎和夫さんの出身が岡山県岡山市であることを知りその日に登録を決めた、問題集は「少なめ3問」がおすすめ!)
- 9) 日本ソムリエ協会(<https://www.sommelier.jp/>)
- 10) **「SOMM」**(2012)(このレベルで勉強できないが、学ぶ楽しさや取り組む姿勢は同じ!)
- 11) 「SOMM INTO THE BOTTLE」(2015)
- 12) 「SOMM3」(2018)
- 13) 神の雫(漫画:日本語版、英語版「THE DROPS OF GOD」、フランス語版「LES GOUTTES DE DIEU」、渡仏前の一読がおすすめ!)
- 14) Wine Folly(ソムリエの方から本を貸していただいた、サイトも充実している)

### 【1次試験】

まず、本を3冊(上記2~4)を購入。参考文献4で、2年前からコンピューターで行う**CBT方式**に変更され、今まで公表されていた過去の出題が非公表となったことを知った。「受験に成功するには」に書いてある、「受験に成功する人には、ある傾向があります。それは、目標が何であれ、それに対して集中して真剣に取り組



み、なおかつ謙虚であり、決して諦めないことです。・・・、『必ず合格するのだ』というポジティブ志向を持つことを、どうぞ忘れないください。」というアドバイスを心に留めた。「ワインの勉強」からは、「ワインとの付き合いは一生のものということ」、「まずはワインを幅広く、そして各項目を平均的に学ぶこと」、「成長していく人は広いヴィジョンを持っている」こと、そしてワイン以外の酒類からも問題が出ていることを学んだ。

7月中旬から約2週間：通勤のバスの中で、問題集500問に目を通す。答えは考えても全く分からないので、速攻で答えをみて雰囲気だけ把握した。

7/23：アルゼンチンの「**トロンテス**」を購入(写真3)。バラ・ジャスミン・ゼラニウムの香りやテイストを3日続けて飲み、何となく特徴が分かった気がした(実はこの品種が本番で出題されて正解できた！→後述)。長期間準備期間があれば、フランス、ニュージーランド、アメリカ、オーストラリアの4か国の**ソーヴィニオン・ブラン**を「鼻と口が初め青草の香り、やがてライムエードのような香りと酸味をとらえるようになるまで(参考図書6の38p)」1週間飲み続けることをBoskerはすすめている。ちなみに、彼女は、「次の週は、**ゲヴェルトトラミネール**、その後は**テンプラニー**リョ・・・」とブドウ品種の経験値を高めていった。

教本(文献1)届く(分厚い!、写真4)。

7/25：イタリアの語呂合わせ・地図(写真5)完成。

7/31：参考図書2の「Check & Repeat」フランス・イタリア以外を学ぶ。会場を予約(①8/29(土)10:30、②9/5(土)10:30)。早めに合格して、2次試験対策をするようなアドバイスがあるが、申し込みが遅かったので、1か月半は準備期間が必要と考えた。

8/11：語呂合わせの参考になる「メモリー・スポーツ」の番組をたまたま見て、場所と意外な組み合わせと流れで印象づけると良いと知った。

8/15：参考図書2の「Japan 日本」から本格的に開始(最近は日本の問題が増えている)。

8/16：ワイン受験.comメールマガジンくるようになった。

8/19：スペインは、「州50%、品種30%に加えて、カヴァ・シェリーを学ぶべし」、と学んだ。

8/22：「料理とのマリアージュ」でワイナリーチェック(私は参考書に線を引いて満足するタイプ!)を沢山していたら腱鞘炎になった。

8/23：参考文献2の後半を一応終え、問題集再スタート。

8/26：試験日を、8/29から9/5の16:45に変更。

8/30：フランス一通り学んだあと、イタリアから(124~317p)はポイントのみに変更。問題を繰り返し解くように心がけた。

9/4：参考書を一通り読み、問題も解き終えた。

9/5(1次試験当日)：10:30から受験するも「**不合格**(写真6)」。次女と会場近くで合流し、家でランチ。疑問に思ったこと(ポムロール・フロンサックの位置、東欧の国々の気候、日本ワインの定義、など)を確認の上、時間の許す限り地図問題と概要を繰り返した。とても暑かったのでタクシーで移動し、会場近くで参考図書2の「Check & Repeat」600個を確認した後、16:45から再受験し「**合格**(写真6)」!!!!!!(地図問題はほとんど即答できた一方、全く分からない問題がたくさんあったので合格ラインぎりぎりだと思った・・・)。お世話になった方々に報告し、Norikoとpetitお祝いをした。

「ある産地のことを調べると、ブドウのことだけでなくそこの人々や歴史、文化や食べ物も学ぶ。まるで世界を旅しているようだ」(参考映画10)と言われるように、この2か月弱の短期間で、今まで知らなかった国々やフランス各地を旅することができた。娘には、「パパ、アル中になっちゃおうよ・・・」と心配されながらも、知的好奇心を刺激され生きるためのインスピレーションを得た新しい形式の旅体験は、この後さらに深まった。

## 【2次試験】

9/6：日仏整形外科学会のWeb会議に参加し、1次試験合格を報告。

「傾向と対策」を学ぶ。50分で赤ワイン2種類、白ワイン2種類、ワイン以外の飲み物1種類が出題される。「外観、香り、味わい、評価、適正温度、適したグラス、デキャンタージュの必要性、収穫年、生産地、ブドウ品種」を選択肢から選んで、マークシート方式で回答する。ワイン以外の飲料は、選択肢の銘柄から1つ選択する。参考図書の「誌上テイスティング講座」で基本品種(赤3種類：**ピノ・ノワール**、**カベルネ・ソーヴィニオン**、**シラー(シラーズ)**、白3種類：**シャルドネ**、**リースリング**、**ソーヴィニオン・ブラン**、+α)の特徴を確認。

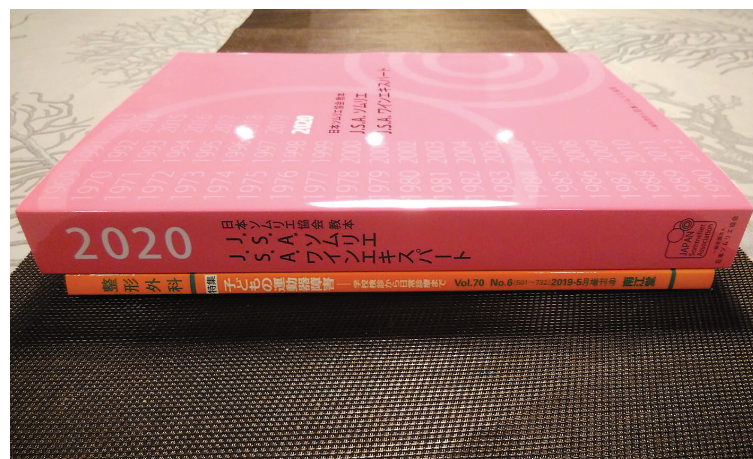
酒屋のロゼコーナーで今まで意識したことなかった「Tavel」が目に入り、日本ワインの「Sur Lie」が認識できた!**カベルネ・フラン**(当日出題されたが正解できなかった品種!)やニュージーランドとチリの**ソーヴィニオン・ブラン**を購入した。

9/8：参考図書5の別冊/認定試験二次攻略テクニックは大変参考になったが、品種の配点が高くなっている最近の傾向が反映されていなかったため、出版社に電話して2019年発行のものが最新であることを確認した。

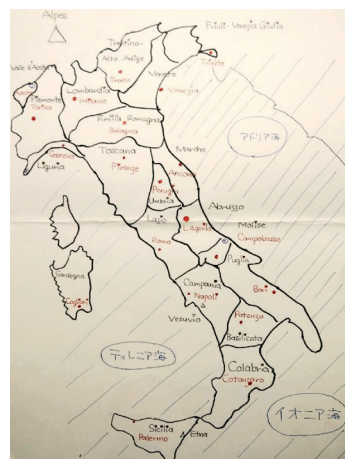
9/10：ソムリエのみさんが、単一品種のワインボトル数本、参考図書14他ワイン関連の本、以前ご自身の勉強に使った香りのセットなどを用意してくださった。Merci bien!!



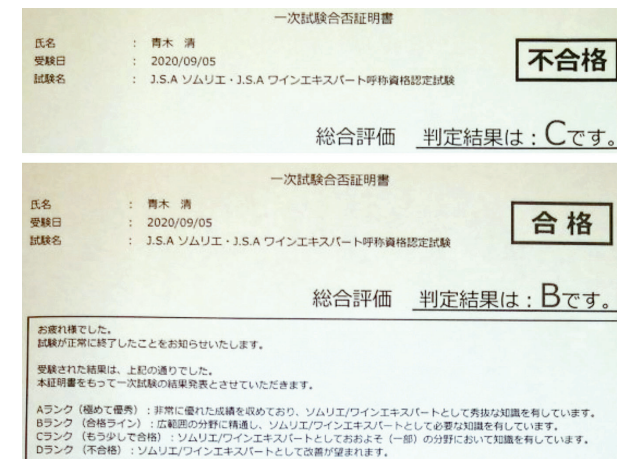
●写真3 Torrontés



●写真4 教本



●写真5 Noriko作イタリア地図に清が記入



●写真6 不合格→合格



9/11：2次試験は、164点満点で、1つのコメントは5分以内で解答すべきと学んだ。品種によって、**甲州**→**丁字**、**リースリング**→菩提樹/リンゴ、**シャルドネ**→新樽/樽香/白桃/ヘーゼルナッツ/アーモンド、**ソーヴィニオン・ブラン**→ヴェルヴェーヌ/メロン、**ミュスカ**→マスカット、**ゲヴェルツトラミネール**→ライチなどの特徴があることを知る。ワイン受験.comでアドバイス動画を見る。白軽め、白重め、赤軽め、赤重め(写真7)と大まかに分けて考え、それぞれの模範解答があることを知った。ブラインド・テイスティングのすすめ(小瓶法)、合格者の体験談とアドバイスが大変参考になる。

9/12：動画(ワイン以外のお酒)を一通り見てカクテルは出ないことが分かった。キュラソーは、コナンのキャラクターに登場することを次女が教えてくれた！以後2次試験当日までの1ヵ月間は、試験に使用される**国際規格のテイスティンググラス**(INAOグラス、ISO規格)×6を購入し、試験にでると言われる2~5千円代のワインを小瓶法や私が小瓶法をアレンジした「**ペットボトル法**(写真8)」にてブラインド・テイスティングを繰り返した。

9/18：ロゼ(写真9)や泡も出る可能性があること、ガメは「若々しい」「第2アロマが強い」という特徴があるため飲んでおく方がよいことを知った。

9/23：「当てにいくより、寄せにいく」ことが大切であることを学んだ(参考図書4)。スピッツの小瓶をスーパーで購入(写真10)。テイスティング・コメントをプリントアウトして、本番に近い形で行うようにした。

9/24：イタリアレストラン「Bacco」の女性ソムリエに相談。白2種類(ドイツ・モーゼルの甘い**リースリング**+ナバの**シャルドネ**)+赤4種類(**ピノ・ノアール**、長野の**メルロー**、シチリアの**シラー**、フランスの**メルロー**-65%)をブラインドで体験させていただき、グラッパもいただいた！彼女は、教本でなく問題集で勉強されたとのこと。また、当日はうどんを早めに食べてからカジュアルな服装で参加されたそう。

焼酎は、芋・麦・米・泡盛を確認すべし！黒糖焼酎「れんと」も購入して少し試飲。

9/30：9月いっぱい試験のためでなくいろいろな品種をチャレンジし、10月になったら試験対策として「基本3種類ずつ6種類」に専念すると決めていた。9月最終日、**マスカットベリーA**の泡とポルトガルの**トゥーリガ・ナショナル**(キムチなど辛い食べ物に合うワインがなかなかないが、この品種や**ガリオッポ**、冷えた**リースリング**は辛いものとのマリアージュ良い!)楽しむ。スクールに行っていないと自分の飲んでるワインをどう評価してよいか分からないため、山崎和夫さんのサイトでテイスティング・コメント付きのワイン3セット(9本)購入！

10/9：テイスティング上達のコツ→「ブラインド」で「並べて比較」することが大切。一次試験の合格率は38%(**整形外科専門医試験よりかなり難しい!**)だが、二次試験合格率は77%で、4回まで続けて受けることが可能なので、「77%×4=99.7%(つまり、ほとんど全員!)」、あきらめずに受け続ければ合格できるはず！(山崎和夫さんの動画)

10/11(前日)：夜、本番と同じ形式で行うも「白2・赤2・ワイン以外」の5種類を全問不正解・・・焦って夜な夜ないろいろ確認飲み(試験当日の朝は普通に起きることが出来なかった)！

10/12(2次試験当日)：ホテルグランヴィア岡山で受験。セーターなど寒さ対策をしていった。受験会場では、私が一番後ろの席であった(1次試験に受かったのが1番遅かったことを意味する・・・)。

<2次試験の詳細>

白1つ目(ワイン①)：2019年の**トロンテス**→もちろんアルゼンチンだが「白は平均2年前」というデータから離れられず2018年にマーク。

白2つ目(ワイン②)：2018年フランスの**シャルドネ**→自信を持って**リースリング**と解答(年と国は当たっていたため大きく加点!)。

赤は4番目のワインが明るい色で答えやすいと考え先に解答(そこが大きな間違いであった!)。

赤1つ目(ワイン④)：2018年ニュージーランドの**ピノ・ノワール**→以前飲んだことがある**ピノ・ノワール**(チリのアコンカグア)と明るい色が似ていたため新世界と判断。年は若いと思ったが「赤は平均4年前」というデータに引きずられ、2年若くする勇気はなく2017年に。国は、オーストラリアとニュージーランドで迷ったが、オーストラリアではないと考えニュージーランドを選択！

赤2つ目(ワイン③)：2018年フランスの**カベルネ・フラン**→タンニンが強烈だったため2017年オーストラリアの**シラーズ**と解答(後で考えるとシラーズで黒くなく明るい色はあり得ないと思うが、その時は「**外観で判断してはいけない!**」という教えと、すでに酔っており時間もないため即答で不正解・・・)。

このワインの解答をしようとした時に、ワイン1つ分すべて違う場所にマークしていることに気づく。かなり動揺したが、まだ10分くらいあったので、「気づいてラッキー！」とpositiveに考え、マークシートを一問分全部写した上で間違っているところを消してやり直した。**マークシートの練習**もしておくことをおすすめする！

ワイン以外：「ラム」は、「マール」と迷った上で「ラム(購入して飲んでいたが少し甘い印象があった)」ではないと考え、「スコッチ」だけ違和感を覚えながら、

香り		特徴
第一印象	強さ	<input type="checkbox"/> 閉じている <input type="checkbox"/> 控えめ <input checked="" type="checkbox"/> 開いている <input type="checkbox"/> 強い
	性質	<input type="checkbox"/> チャーミングな <input type="checkbox"/> 華やかな <input checked="" type="checkbox"/> 濃縮感がある <input type="checkbox"/> 深みのある <input type="checkbox"/> 複雑な
果実	熟度低→高	<input type="checkbox"/> イチゴ <input type="checkbox"/> ラズベリー <input type="checkbox"/> ブルーベリー <input type="checkbox"/> カシス <input checked="" type="checkbox"/> ブラックベリー <input type="checkbox"/> ブラックチェリー <input type="checkbox"/> 干しプルーン <input type="checkbox"/> 乾燥イチジク
花	花	<input type="checkbox"/> バラ <input checked="" type="checkbox"/> すみれ <input type="checkbox"/> 牡丹 <input type="checkbox"/> ゼラニウム
植物	植物	<input type="checkbox"/> 赤ピーマン <input type="checkbox"/> メントール <input type="checkbox"/> シダー <input type="checkbox"/> ローリエ <input type="checkbox"/> 杉 <input type="checkbox"/> 針葉樹 <input type="checkbox"/> ユーカリ
	ドライ/菌類	<input type="checkbox"/> ドライハーブ <input type="checkbox"/> タバコ <input type="checkbox"/> 紅茶 <input type="checkbox"/> キノコ <input type="checkbox"/> 腐葉土 <input type="checkbox"/> 土
芳香	動物/樽	<input type="checkbox"/> 血液 <input type="checkbox"/> 生肉 <input type="checkbox"/> 乾いた肉 <input type="checkbox"/> なめし革 <input type="checkbox"/> ロースト <input type="checkbox"/> コーヒー <input checked="" type="checkbox"/> カカオ <input checked="" type="checkbox"/> ヴァニラ
香辛料	スパイス	<input type="checkbox"/> 黒胡椒 <input type="checkbox"/> 丁香 <input type="checkbox"/> シナモン <input type="checkbox"/> チリペッパー <input type="checkbox"/> 甘草 <input type="checkbox"/> 杜松の実
化学物質	その他	<input type="checkbox"/> タール <input checked="" type="checkbox"/> 樹脂 <input type="checkbox"/> ヨード
香りの印象	熟成感	<input type="checkbox"/> 若々しい <input type="checkbox"/> 嫌気的な <input type="checkbox"/> 熟成感が現れている <input type="checkbox"/> 酸化熟成の段階 <input type="checkbox"/> 酸化している
	特性	<input checked="" type="checkbox"/> 第1アロマが強い <input type="checkbox"/> 第2アロマが強い <input type="checkbox"/> ニュートラル <input checked="" type="checkbox"/> 木樽からのニュアンス



●写真7・左 模範解答の一例(赤重めの「香り」)  
 ●写真8・右 ペットボトル法(清考案、水やお茶など匂いが残りにくい液体のボトルをしっかりと洗って空気がない状態でキャップをする、小瓶より空気の調整が容易!Let's try, using various bottles!!)

●写真9 今後の試験に出るかもしれないロゼワイン、左からWhite Zinfandel(ジンファンデル)、Rose d'Anjou(グロロー主体)、Tavel(グルナツシュ主体)(青枠は山崎和夫さんおすすめの小瓶法)  
 ●写真10 経験値を高めるワイン以外の飲み物



「スコッチ・ウイスキー」を選択。

「ワイン以外は、アルコール濃度が高いことが多いため、ワインの解答がすべて終わってから飲むべし!」、という教えを守ったが、マークシート間違えが響いて、考える時間は、2~3分しかなかった。迷いながら、白・赤ワインはすべて飲み干した。私は、日本ソムリエ協会の用意してくださるワインはおいしいので、すべて飲む!と決めていた。ちなみに、今年はコロナ対策として、飲んだワインを吐く入れ物はなしとなっていた。また、終わってから他の受験者のテーブルを見ると皆さん半分くらい残されていたので、マークシートミスをしないうちにはそれもありかもしれないと反省した。選択肢に含まれる国や品種の数が、例年よりかなり増えていた。

自己採点の合計では、山崎和夫さんの基準で、24点の加点が得られた(写真11)。

### 【合格発表】

10/21:朝Norikoが、ぶどう(瀬戸内ジャイアンツとシャイン・マスカット)を出してくれた。金木犀の香りを感じながら通勤。合格発表にて名前あり!(最初、「アオキ」多くて分かりにくかったので受験番号を何回も確認)。Norikoに電話で報告「そうだった!忘れてたわ・・・おめでとー!!!」

### 【学んだこと、そして今後】

合格発表までの間に、参考図書6を読み直した。以前読んだ時には、ストーリーに魅せられて一気に読んだが、読み返すと、新しい気づきがたくさんあったので引用する。

- 1) 血に次いでワインは人間の身体の構成要素を含む最も複雑な母体(マトリックス)なんだ(9p)
- 2) 価格やブランドについて外部の雑音を受け流して、感覚を正確に捉えるために自分を無にすること。それは私たちのだれにでも可能に思えた。ふだん見過ごしている感覚へと波長を合わせることで豊かな体験を享受できるのだ。私も真剣にやってみようと思った(21p)
- 3) 味わうということは、単に人生を堪能することの決まりきった比喻ではない。・・・**良い味を味わうことは、よく生きることであり、自分自身を深く知ることであった。**だから、よく味わうことは、食用にするものなかでもっとも複雑なものから始めなければならない—そう、ワインから。(23p)
- 4) マスター・ソムリエに関しては、「毎年200人が受験し、95%が落ちる。マスター受験者は試験までの年月、平均すると2万本以上のワインをテイastingし、1万時間勉強し、4千枚以上のフラッシュカードを作り、・・・。(64p)

- 5) いわば、舌の筋トレ(69p)
- 6) 「ワインが人生を変えることもできる」、「ぼくの人間性をいくつかの面で変えてくれる」(79p)
- 7) 味によく注意していること、ワインのメッセージをどう聞くかを学ぶことは**自分の周りのすべてに心を開いていること**によって始まる、「どこにいても新しい経験を受け入れる練習をする(97p)
- 8) 「ワインを飲む目的は何かというと、匂いを楽しみたいからだ」、味とはほとんど匂いで・・・(143p)
- 9) ワインの専門知識の習得は、ベンチプレスを持ち上げて鍛えることよりも新しい言語をピックアップするのに似ている。・・・概念的知識を広げることによって学ぶのだ(169p)
- 10) よいワインは変化だ、ワインは周囲の世界と自分との関係を変化させ、人生観をも変化させる(219p)
- 11) 「ひと口飲んで、2口目を飲みたくなること」・・・「良い」ワインの明確な定義・・・とてもシンプル(291p)
- 12) 私たちはワインを味わうとき偉大さを知るのだ。そしてそれは記憶として生き続ける(293p)
- 13) 完璧な動き: 余裕、エレガント、優雅、本当にソフト(外来診療でも参考になる!)
- 14) 同じワインを二度飲まない(417p)
- 15) 品種: ケナール、ヴィオニエ(423p)、リースリング(424p)

- 16) 人生の「意味を付与し直す」・・・「人間としての在り方を変えるでしょう」(437p)
- 17) ソムリエのように脳を点火させるにはどこからスタートするといいたろう・・・感覚の記憶を蓄積することから始めなさい。あらゆる**匂いを嗅いで、それに言葉を付与すること。**(440p)
- 18) ブラインド・テイastingにとどまらず、人生のほかの分野に吹き込む新たな落ち着きと自信がついていたことに気づかされた。・・・どんな食べ物を食べるべきか選ぶ能力は、利いた風なことを言うと、ほかのさまざまな永続するものについてもあなたが勇気と手際の良さでもって選べるようにするだろう・・・ムシン、あるいは「ノー・マインド」という禅の概念をしっかりとつかんでいた(442p)
- 19) ワインに何かを感じ、あなたの諸感覚を解放することは、**ただ注意を払うこと**によって始まる。そして**おいしく楽しく味わうこと**だ。(445p)
- 20) この冒険を経た著者の一般人に対する思いは、すべての人がワインに宿る魂を発見する能力を持っているのだから、味わうのに特別な感覚はいらない・・・楽しむ心で飲めばいい。・・・よく味わって楽しむこと。(452p)

番号	収穫年	生産地	主なぶどう品種
1	<del>2019年</del> 2018	アルゼンチン ④	Torrontés ⑤
2	2018年 ②	フランス ④	Chardonnay リーディング
3	<del>2018年</del> 2017	フランス <del>ネーブル</del>	Cabernet Franc <del>ネーブル</del>
4	<del>2018年</del> 2017	ニュージーランド ④	Pinot Noir ⑤
5	<del>2018年</del> 2017	ニュージーランド	

●写真11 2次試験の答え合わせ



●写真12 田崎真也さんのサイン入り認定証



●写真13 バッジ



●写真14 右上からラム、イェーガー・マスター、クレム・ド・カシス



これらのメッセージの数々は、一人の人間としてどう生きていくかという根本的な問いを投げかけてくれる。

その後、田崎真也さんのサイン入りの証明書(写真12)とバッジ(写真13)が届いた。

Norikoは、**イエーガー・マイスター**を「養命酒みたいで体に良い感じ!」とコメントし、**クレム・ド・カシス**なども含めて、我が家の食後酒の幅が広がった(写真14)。

私自身も、これらのことを意識して過ごした日々のおかげで、今までとは違う景色が見えるようになった。具体的には、①すべての食事の外観・香り・味わいを意識して生活するようになったこと、②金木犀の香りが例年より遠い距離から強く感じられること、③花を見た時にワインのイメージが連想できるようになったこと(写真15)、④**リースリング**や**ヴィオニエ**の多様性や飲んだことのない品種に対する好奇心でわくわくしていること(今日はイタリアの**トレヴィアーノ**と南アフリカの**ピノ・ノワール**を飲みながら原稿の最終チェックをしている)、⑤外来診療において事前準備を十分にした上で、一度「先入観」を捨て「無心」になり、問診・触診などをきちんと行い、そして自分で考えることの重要性を再認識できたこと、⑥当直の際に、

「Bushido」のCDを繰り返し聴くことが多かったが、最近では、参考サイト14の動画を見て学ぶ時間が増えつつある、などである。

今後は、日仏整形外科学会の広報委員として、ワインの魅力・多様性(写真16)、ワインに関する英語やフランス語の紹介などをINFOSやリニューアル予定のホームページの中で皆さんにお伝えしていきたい(「清のワイン奇行(仮題)」)。

また、今後の日仏整形外科学会はもちろん、2021年4月岡山大学尾崎教授主催の腫瘍の国際学会in岡山、2021年12月に予定されている日本小児整形外科学会in岡山、2023年の日整会by尾崎教授などにおいて、皆さんと濃いめにソーヴィニョンなacademic talkが安全にできることを楽しみにしている。

海外からのゲストをおもてなしするために、フランス語や英語に接する時間を確保している。2021年1月に高2の娘とtogetherに受験した英検準1級の1次試験はなんとか合格したので、現在、2次試験の対策をしている。ワインに含まれるポリフェノールの力を借りながら自己研鑽を続け、将来はメモリー・スポーツのシニアの部に参加したいと考えている。

今回のワインエキスパート受験に関して、たくさんの人に感謝したい。受験を提案し、日々問題をクイズ

形式で出し、苦手な品種を分析しながら経験値を上げてくれたNoriko、リビングで寝ている私をあの手この手で起こすなどあたたかくサポートしてくれた娘Amica(杏美花)&Amore(紅杜玲)、きっかけを作ってくれたDr.岡&Kazuo、たくさんのアドバイスをいただいたソムリエのお二人、ソルト・リックのマスター、そして、約7000年の間ワインに関わってきた全ての人々に感謝したい。

Merci beaucoup beaucoup!!!

## まとめ

- 1) 整形外科医は、飲食店での勤務経験がなくても、ワインエキスパートの試験を受けることができる。
- 2) 地方に住んでいても、短期間であっても、家族やワインに詳しい友人、参考書やサイトの力を借り、集中して学ぶことにより合格は可能である。

- 3) ワインエキスパートの試験を通して、そして、特別の理由をもってワインをテイastingすることによって、単にワインにとどまらず、生きる上でのパワー(感じ方・考え方・表現の仕方・楽しみ方など)が得られる。



●写真15 同じ花の季節による変化(左から夏→秋→冬)



●写真16 第17回日仏整形外科学会(岡山→直島)で試みたワインの多様性



# BogdanのBon voyage! ~Vol.1 Provence~



Bogdan PROPECK

プロヴァンス。

ここは私にとって忘れられない思い出に満ちた場所であり、フランスやヨーロッパの行楽客のランデヴーポイントでもあります。海、谷、山が連なる風景が、古代、ローマ時代、中世からの現代までの歴史を結びつけます。そのライフスタイルは、人生の甘さがキーワードで、地中海と韻を踏む美食が盛り立てます。本稿では、夢を創造し、多くのアーティスト、旅行者、夢想家に刺激を与えてきた私の故郷を紹介します。日常を忘れて、静けさに向かって一緒に旅しましょう。

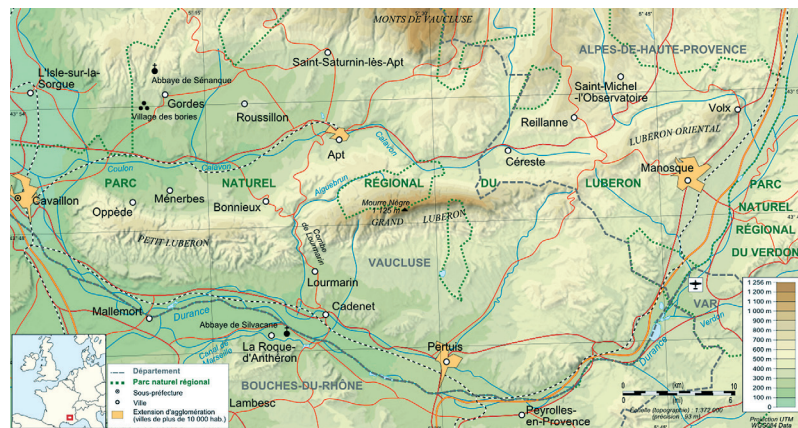
パリから遠く離れた南仏に位置するプロヴァンスでは、どこまでも続く美しい風景、古くから存在する村々、歴史的建造物を体感できます(地図1)。まずどこに滞在するか。最初はAix en Provence、私の故郷をお勧めします(写真1)。Marseille空港またはAix en Provence

TGV駅からアクセスできます。旧市街には、中心の歩行者天国に多くのホテルがあり、古い路地やプロヴァンス有数のマルシェを楽しめます。もちろん地元的美食を味わうことができるカフェやレストランもたくさんあります。

Aix en Provenceは、エクスカーションの起点として最適です。北は鷹の巣村Gordes、Lourmarin、Lacoste、Bonnieuxなど、フランスで最も美しい村があるLuberon地方自然公園があります(地図2, 写真2,3)。南には地中海が広がり、CassisやMarseilleなど海岸沿いの村や街を楽しめます。ヨーロッパで最も美しい入り江や崖(カラंक)を絶景ポイントから見下ろしたり、ボートでカラंकクルーズを楽しんだりすることもできます(写真4,5)。西は、ArlesやPont du Gardなど2000年前のローマ時代の遺跡が点在し、ゴッホが描いた名所にも立ち寄れます(写真6)。東は夏がおすすめです、広大なラ



●地図1 Provence



●地図2 Luberon

ベンダー畑はもちろんのこと、ヨーロッパ最大のVerdon渓谷とトルコブルーに輝くSainte Croix湖の美しさに圧倒されることでしょう(写真7)。

プロヴァンスの人々と友達になるのはとても簡単です。暖かくて日差しの強い気候のせい、お互いにキスしたり、ハグしたり、人懐っこいラテン気質を持っているからです。もし恥ずかしがり屋でなければ、プロヴァンスの人々の温かさを発見してみてください。プロヴァンスの言語はもちろんフランス語です。Aix en Provenceは学生の街で、全国から人が集まるため、アクセントは強くありません。一方、Marseilleなどの港町は、イタリア語を彷彿とさせるアクセントがあり、歌うように喋るといわれています。よく日本の大阪弁に例えられます。私は大阪在住ですが、大阪弁は喋れません。でもMarseilleのアクセントはなんぼでも真似できます。またこの地域の言語として、何世代も継承されてきましたが、時間とともに失われつつあるOccitaneもあります。残念ながら、プロヴァンスで日本語を話す人はほとんどいません。英語は通じることが多いです。

ご家族やご友人へのお土産には、Aix en Provenceの伝統菓子Calisson、AOPのオリーブオイル、ラベンダーのサシェをお忘れなく。セミはこの地域では幸運をも

たらすと言われ、セミがモチーフになったお土産も定番です。この地域を代表するワインは、Côte du Rhôneで、グルナッシュとシラーを中心に構成されたパワフルで力強い赤ワインです。また1970年代、地中海に面したCassisで、最初のロゼAOCが作られました。アペリティフとして心地よい香りを与えるロゼは、ブイヤベースとの相性も抜群です。フランス人にとって、よく冷えたロゼは夏の飲み物、ヴァカンスを想わせるワインなのです。Marseilleではパステイスというアニス風味のリキュールも有名です。夕方になると、パステイス片手にベタンクに興じる現地の人を見かけます。これぞプロヴァンスの風物詩？



●写真2 鷹の巣村Gordes



●写真1 Aix en ProvenceとSante Victoire山



●写真3 Sénanque修道院とラベンダー畑



さて、プロヴァンスへの空想旅行はいかがでしたか？  
いつかプロヴァンスの青空の下で、一緒にロゼワインを飲む日を夢見て。  
Bon voyage!!!



●写真4 Cassisのカランク

#### 【ミニ情報】

■観光地訪問には、ガイド付きの半日または1日ツアーをお勧めします。英語、日本語もOKです。

[http://www.rendezvousprovence.com/en/excursions1\\_en.html](http://www.rendezvousprovence.com/en/excursions1_en.html)

■Aix en Provenceのダウンタウンの情報は、観光案内所へ  
<https://www.aixenprovencetourism.com/ja/>

■おすすめレストラン(美味しくてリーズナブル)：  
Aix en Provence：「Le Zinc d'Hugo」お肉のグリルが最高

Aix en Provence：「Le petit Verdot」地元の食材の料理とワイン

Cassis：「Chez Gibert」ブイヤベースが絶品

Les Baux de Provence：「Bistro la Reine Jeanne」豊富なプロヴァンス料理



●写真6 Arles



●写真5 Marseilleの港



●写真7 Sante Croix湖

#### ■Bogdan PROPECK



フランス Aix en Provence出身。

2012年まで、南仏で外国人向けのツアーガイドを行っていた。

2018年～2019年NHK Eテレ「旅するフランス語」に、女優黒木華さんの旅のパートナーとして出演し、ボグダンさんの愛称で親しまれた。

現在、大阪でフランス家庭料理のケータリングサービスと料理教室を中心に活動している。

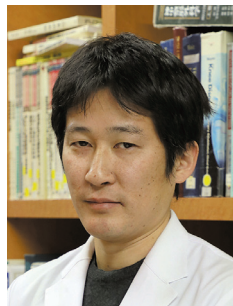
<https://www.facebook.com/petit.chef.osaka/>

[www.youtube.com/channel/UCKQXatvWM1fZ4u3n1CLPdxQ?view\\_as=subscriber](http://www.youtube.com/channel/UCKQXatvWM1fZ4u3n1CLPdxQ?view_as=subscriber)



## 深遠なるフランス式サンドイッチの世界 ～Bordeaux編～

大阪医科大学 整形外科学教室 藤城 高志



フランスは美食の国として有名で、色々な美味しい食べ物がありますが、サンドイッチに勝るものはありません。

我々日本人のサンドイッチのイメージは、食パンに色々な具材を挟み、綺麗に三角形、もしくは長方形に切り揃えられたイギリス式のものだろうと思います。一方フランス式サンドイッチは、フランスパン(バゲット)に切れ目を入れ、その中にハム、チーズ、野菜などが雑然と挟んだものです。私がボルドーへ留学した初期の頃、インターンルームに食べかけのサンドイッチがころがっているのをよく目にし、“あんなものは絶対に食うまい”と思っていました。しかし、小腹が空いた時、旅行に出かける際にふらっと立ち寄ったBoulangerie(パン屋)で食べているうちに、自分達の生活になくってはならないものになると同時に、“なんと奥深い食べ物か”ということが次第にわかってきます。恐らく、フランスのサンドイッチは、日本のおにぎりと非常に似た存在なんだろうと思います。

このフランス式サンドイッチは、街のBoulangerieに行けば必ず出会うことができます。基となるバゲットはBoulangerieによって違うのももちろんのこと、中に挟む具材もそれぞれであり、無数の選択肢があります。それ故、“今日はこんなサンドイッチを食べたい”、“今日はサンドイッチでこんな気分になりたい”という我々のわがままで多様な要望にも、フランス式サンドイッチはいつでも答えてくれます。その際にまず重要となるのは、値段、大きさ(どれくらい満腹になるか)、中に挟まれた具材でしょう。ただし、ことはそれほど単純ではありません。フランス式サンドイ

ッチは、小さいものでも20cm程度、大きなものになると30cmのバゲットを基本とするため、“一口目の美味しさ”はもちろんのこと、それを飽きずに食べさせる“持続力”も非常に大事となってきます。さらに、中脳皮質系ドーパミン神経を刺激しまくる“今日、これ、絶対食べたい”と思わせる見た目の美しさ(“風貌”と言います)も、至極のサンドイッチには必ず備わっている要素です。

この紀行文では、私たち家族がボルドー留学中に愛してやまなかった珠玉のサンドイッチ5選を紹介いたします。

### Sandwich, 4.0 £ @Au Périn Moissagais (72 Cours de la Martinique, 33300 Bordeaux)



Au Périn Moissagaisはボルドーの北部郊外にあります。重厚な石作りのいかにも“ヨーロッパ調”な住宅街にひっそりと佇むこのBoulangerieから紹介するのは、その名も“Sandwich”。具材はハムとチーズで、これは

日本のおにぎりという“梅”にあたるのではないかと思います。

バケットは“端っこが一番美味しい”と皆が言いますが、その両端が切り落とされた無骨な風貌。これまたワイルドなルックスのハムとエメンターラー。一見身構えますが、見た目とは裏腹に非常に優しく懐かし味(もちろん、こういうものを昔食べていた訳ではありません)の“山のフドウ”的サンドイッチ。硬いバケットの端っこが省略されることで、最初の一口目からスムーズにサンドイッチ中枢部へ迷い込むことができます。そうするとなるほど、バケットの端っこないことは、この視覚的なワイルドさと味覚的な郷愁を同時に演出するための工夫なんだと理解できます。そしてもうひとつこのサンドイッチを特別なものになっているのは、なかなか出会えないというPremium Feeling。“今日はあるやん!”という喜びも、フランス式サンドイッチを楽しむ醍醐味の一つです。

### Thon Crudités, 4.5 £ @Maison Lamour (157 Rue Judaïque, 33000 Bordeaux)



Maison Lamourはボルドーの中心地を取り囲む住宅街“Old Bordeaux Town”にあり、目の前には市民プール“piscine judaïque”があります。このBoulangerieはフランス国内のテレビ番組でのバケット・コンテストで優勝した経験があり、小さな店ながらもいつも繁盛しています。

賞を受賞しただけあって、とにかくバケットがうまい!この小麦香るバケットは、日本では絶対に食べられません。ここでは色々なサンドイッチを試しましたが、ハム、チキンなどではこの芳醇なバケットと対峙することは難しく、ツナがベストな具材であると考えます。決して気を銜わない味と風貌の燻銀サンドイッチ。しかし、もういつまでも延々と食べ続けていられるような、麻薬的危うさを兼ね備えています。

### Poulet Curry, 4.5 £ @Pomponette (2 Rue Répond, 33000 Bordeaux)



このBoulangerieもOld Bordeaux Townにあり、息子が通っていた小学校からの帰り道にありました。隣は高校で、まさにその購買部的なBoulangerieとも言えましょう。ここでは豊富な種類のサンドイッチを提供していますが、その中で紹介するのはカレー味の“Poulet Curry”。カレー味のサンドイッチはフランスでも非常にレアで、滅多にお目にかかることはできません。

とにかく大きい、大人でも半分食べれば満腹になります。さすが、フランスの高校生の胃袋を支えるサンドイッチです。チキン、トマト、ルッコラなどの具材も十分な量で、これらがマイルドなカレー味にまとめられていますが、このサンドイッチの“肝”は紫玉ねぎのスライスです。この辛味が、巨大なカレー風味のサンドイッチを大人な味わいにし、さらに最後まで飽きずに食べさせる絶妙なアクセントとなっています。ランチはもちろんのこと、ワインのアテとしても楽しめる、非常に守備範囲の広い変わり種サンドイッチです。



**Jambon Crudités, 4.5 £ @Laurent Lachenalt**  
(101 Avenue Jean Jaurès, 33600 Pessac)



Laurent Lachenaltはボルドーの隣町のペサックにあり、ゆったりとしたイートインスペースがあります。ボルドー留学中、“毎週土曜の昼はこの店でサンドイッチ”というのが我々家族のルーチンでした。この店はBoulangerieというよりはカフェの趣で、ケーキなどのスイーツが店のメインのショーケースに所狭しと並んでいます。店の奥まった場所にあるこじんまりとしたケースの中に至高のサンドイッチ“Jambon Crudités”は眠っています。

とにかく、紐で縛られたパケットから大きくはみ出したハムとチラつくスライスゆで卵。この妖艶なルックスにやられて、この店でこの“Jambon Crudités”以外を食べたことはほとんどありません。パケット、具材のどれもが非常に素朴な味わいであるものの、これらが三位一体となった時に醸し出す目眩く華やかな味わい。(多分)子供から大人まで、皆が大好きな味。私たち家族がボルドー滞在中に最も食べた癒し系サンドイッチです。

**Le Fermier, 3.5 £ @Elgoyhen**  
(44, 46 Rue Grateloup, 33000 Bordeaux)



最後にご紹介するのは、Elgoyhenのサンドイッチ。このBoulangerieはトラムB線Bergonie駅前、ボルドー大学留学生センターの隣にあります。比較的新しい建物で、いかにも“街のパン屋”という外観で、オーソドックスなサンドイッチが並びますが、ここで食すべきは“Le Fermie”、日本語で“農場”を意味します。

中の具材はチキン、レタス、トマトというフランス式サンドイッチで非常にポピュラーなもので、これはおそらく日本のおにぎりという“おかか”的なものだろうと推察されます。ポイントは雑に塗られたマスタード。次の一口はマスタードパートなのか、そうじゃないのか、と思うだけで、どんどん食べ進めていってしまいます。もしこのマスタード分布を計算してやっているなら、フランスは本当に恐るべき国です。カリカリに焼かれたバゲットとしっかりと具材の釣り合いが絶妙であり、“こんな単純な食べ物がどうしてかこんなにうまいのか”という思いから、必ず“なんでや、なんでや”と禅問答的トランス状態に陥りながら食すことになります。われわれ家族が絶賛するボルドーのミラクルサンドイッチです。

日本にも美味しいものはたくさんありますが、フランスの“美味しい”はそれと似て非なるものです。しかし、異国の人間ですら“美味しい!”と虜にしてしまう、そして5£以下で食べることのできるフランス

式サンドイッチは、“フランス美食”の究極のかたちと言っても過言ではありません。まだ自分の知らない奇跡のサンドイッチがフランスに眠っていると思うと、ワクワクが止まりません。皆様もフランスを訪れた際は、是非お気に入りのサンドイッチを見つけてください。



## フランス手術器械のおなまえ

滋賀医科大学 整形外科学講座 前田 勉



このコーナーはフランスの手術室に入ることになった若き日本人整形外科医のご活躍をお助けするために、手術器械の名前を知ってもらおうというのが目的です！

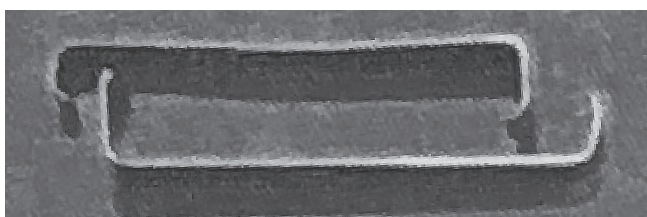
今回の情報はホームページ上で公開しており更新が可能です。訂正や追加情報を随時募集しています。是非、写真(絵でも結構です)をつけていただいて日仏整形外科学会事務局にお教えください。つぎの交換研修生のために情報をつなぎましょう。

### 【Comprese】



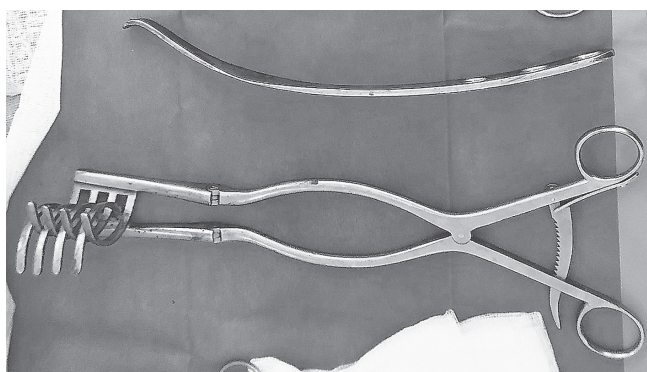
手術に参加することになって、はじめに活躍できる場面はガーゼで拭くことではないでしょうか。辞書で引くと« gaze »という言葉もありますが、これは単なる薄い生地のことをさしますので、フランスの手術室では一般的でないようです。オペ室で使うガーゼは、ガーゼをまとめて« compresse »したものでから« compresse »と呼ぶようです。

### 【Farabeuf】



Dr Louis Hubert Farabeuf(1841-1910)のお名前に由来をもつ筋鉤です。ファラブはフランス医学に衛生学を導入したと言われる外科医で、手術器具を他にもいくつか考案しているようです。正式名称は« écarteur de Farabeuf »で、フランスでは一般的な筋鉤のようです。

ベックマン開創器は« (écarteur de) Beckmann »で、ホーマンレトラクターは« (écarteur de) Hohmann »または« contre coudé »です。



### 【Ciseau とCiseaux】



単数形で「のみ」・複数形で「はさみ」になります音が同じです。

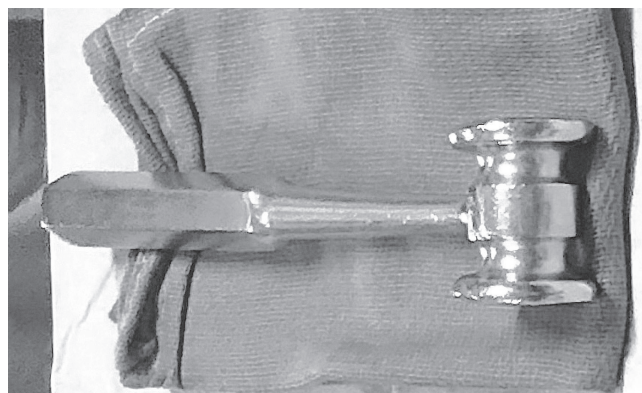
「スイゾ！」では、どちらのことなのか分かりませんから、手術の流れから判断するしかありません。正しく指定するには« ciseau à frapper »とか« ciseaux mayo »です。

### 【pince = 挟む道具】

« Pince-gouge »はリウエル(gouge=丸鑿)で、個人的には好きな響きの音です。

コッヘルは« Pince Kocher »です。挟むタイプの道具は「パンス〜」です。

### 【Marteau】



ハンマーです。(岡崎良紀先生より情報を頂戴しました。ありがとうございます。)

### ※追記

手術室に入ったら、多分はじめに聞かれるのは手袋のサイズでしょう。

« Quelle est votre taille de gants? »

« Sept et demi, s'il vous plaît! »

てな感じで、つかみはOKではないでしょうか？

それから、オペナース・麻酔ナース達にお土産を持っていくとすごく好感度がアップします。お土産は日本以上にポイントが高いような気がしました。日本から持っていくよりも地元の« chocolaterie »で詰め合わせを買うほうが選ぶのが簡単です。ご参考までに・・・





## 日本側・フランス側役員を紹介します

### 日本側役員

会長	金子 和夫	名誉会員	小野村敏信
副会長	大橋 弘嗣		小林 晶
書記長	本間 康弘		坂巻 豊教
会計	青木 清	顧問	瀬本 喜啓
書記	前田 勉	交換研修委員	水野 直子
幹事	飯田 哲		西脇 徹
	今井 晋二		金城 健
	柘原 俊久	交換研修外部委員	竹本 充
	岸 孝章		大槻 周平
	久保 俊一		藤城 高志
	田中 康仁		内藤 聖人
	藤原 憲太		市原 理司
	星 忠行		
	安永 裕司		

### フランス側役員

President	Philippe Hernigou (Paris)
Secrétaire General	Philippe Merloz (Grenoble)
Tresorier	Philippe Wicart (Paris)
Membre de Bureau	Philippe Liverneaux (Strasbourg)
	Alain Durandeu (Bordeaux)
	Jean Pierre Courpied (Paris)
	Jacques Caton (Lyon)
	Olivier Guyen (Lyon)

## 日仏整形外科学合同会議 (AFJO) 開催一覧

会期	開催地	議長
第1回 1990年11月12日	パリ	Régie C. Michel
第2回 1992年10月4日	京都	七川 歆次
第3回 1994年11月7日	パリ	Charles Picault
第4回 1996年4月13~14日	東京	菅野 卓郎
第5回 1998年9月17~19日	リヨン	Jean Pierre Courpied
第6回 2001年5月11~12日	大阪	小林 晶
第7回 2003年9月26~27日	グルノーブル	Philippe Merloz
第8回 2005年5月6~7日	京都	瀬本 喜啓
第9回 2007年9月14~15日	ニース	Jacques Caton
第10回 2009年5月28~30日	沖縄	大橋 弘嗣
第11回 2011年6月2~4日	ポルドー	Arain Durandeu
第12回 2013年5月30~6月1日	京都	飯田 寛和、田中 千晶
第13回 2015年6月4~6日	サン・マロ	Philippe Hernigou
第14回 2017年5月12~13日	日光	高橋 和久、老沼 和弘
第15回 2019年9月14~15日	リヨン	Luc Kerboull
第16回 2022年4月4~6日	奈良	田中 康仁

## 日仏整形外科学会 (SOFJO) 開催一覧

会期	開催地	会長
第1回 1987年11月6日	神戸	七川 歆次
第2回 1988年10月29日	東京	七川 歆次
第3回 1989年11月11日	大阪	七川 歆次
第4回 1991年11月9日	大阪	七川 歆次
第5回 1993年10月30日	大阪	七川 歆次
第6回 1995年5月10日	大阪	七川 歆次
第7回 1997年11月1日	大阪	七川 歆次
第8回 1999年10月16日	大阪	山野 慶樹
第9回 2000年11月25日	横浜	坂巻 豊教
第10回 2002年10月12日	弘前	原田 征行
第11回 2004年11月6日	神戸	小野村敏信
第12回 2006年10月14日	京都	久保 俊一
第13回 2008年9月27日	東京	金子 和夫
第14回 2010年9月25日	広島	安永 裕司
第15回 2012年9月22日	東京	飯田 哲
第16回 2014年9月6日	福岡	塩田 悦仁
第17回 2016年11月25~26日	岡山・直島	藤原 憲太、青木 清
第18回 2018年7月7日	大津	今井 晋二
第19回 2020年12月19~20日	神戸	星 忠行
第20回 2023年	横浜	柘原 俊久





あなたも  
フランス研修に!

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFECOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は下記のとおりです。詳しくは下記のとおりです。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験していただける先生は応募をご遠慮ください。

募 集 要 項

1) 募集人員	若干名（2022年度）
2) 研修条件	<p>1. 滞在期間は3か月間を原則とする。 この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在する場合の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。 1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。 7月、8月はフランスのパカンスシーズンになるので避ける方が望ましい。</p> <p>2. フランスでの滞施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。</p> <p>3. 費用について a) 渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。 b) フランス滞在中の滞在費、食費および移動などの費用は原則として自己負担とする。</p> <p>4. 帰国後、日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。</p> <p>5. 本年度の研修開始時期は4月以降とする。</p>
3) 応募条件	<p>1. 応募者は日仏整形外科学会会員であること。 2. 応募者は日本整形外科学会専門医であること。 3. 原則として40才を応募年齢の上限とする。 4. 勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。 5. フランス語または英語を話すもの。</p>
4) 応募に必要な書類	<p>1. 日仏整形外科学会交換研修申請書（TXT、PDFをダウンロード・毎年様式が変わるので、注意する事） 2. 履歴書（大学卒業以降とする） 3. 応募の動機や抱負についての小論文 4. 日仏整形外科学会会員1名の推薦状—推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。 5. 業績目録—主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要） 6. 渡仏承諾書 a) 大学の医局勤務者………教授の承諾書 b) 病院または施設勤務者………勤務している病院または施設の責任者の承諾書 (大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。) 以上1. 以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、コピーを23部を同封すること。</p>
5) 選考方法	<p>1. 第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は2021年8月上旬に個別に連絡する。 2. 書類選考に合格したのものには2021年9月に面接を行う予定である。面接の時間は個別に通知する。 3. 合否は2021年9月下旬に通知する。 4. 合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。</p>
6) 申請締め切り	2021年7月31日必着
7) 申し込み先	<p>日仏整形外科学会事務局 〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学整形外科学講座内 Tel(077)548-2252 Fax(077)548-2254</p> <p style="text-align: right;">日仏整形外科学会 係 前田 勉</p>

# フランス人整形外科医 受け入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFECOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施いたします。

受け入れ期間は原則として3ヶ月間ですが、1ヶ月でも2ヶ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたくお願い申し上げます。

来日するフランス人医師は、英語を話せることが条件になっております。なお、日仏間の旅費はSOFECOTが支給いたします。フランス人医師の受け入れに関して、ご興味やご質問がございましたら、下記までご連絡いただけたら幸いです。

日仏整形外科学会 会長 金子 和夫  
日仏整形外科学会 書記長 本間 康弘  
連絡先：順天堂大学 整形外科・スポーツ診療科

〒113-8421 東京都文京区本郷2-1-1  
TEL:03-3813-3111  
yhomma@juntendo.ac.jp





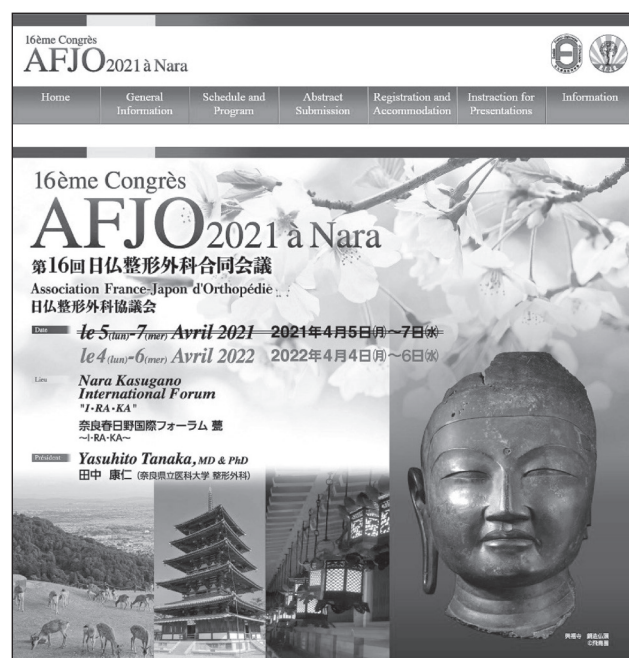
# 第16回日仏整形外科合同会議 開催のご案内

(16ème Réunion de l'Association France-Japon d'Orthopédie, AFJO)

この度第16回日仏整形外科合同会議 (AFJO) を奈良で開催させていただくことになりました。会期は当初2021年を予定しておりましたが、コロナ禍の影響で延期し、折角日本に来ていただけるのであれば是非桜の季節にと考え、2022年4月4日～6日にさせていただきました。会場は東大寺の境内で、奈良公園に位置する奈良春日野国際フォーラム 麓～IRAKA～です。4月4日は奈良を巡るツアーを計画いたしており、学会は5日と6日に行います。ツアーは、日本に何度も来られた方も、初めての方も十分ご満足いただけるよう奈良のエッセンスを凝縮したようなコースを準備いたしております。

私とフランスとのかかわりは、1998年にボルドーで開催された Association Française de Chirurgie du Pied (AFCP) に招待されて講演させていただいたことに始まり、その後2000年にパリで行われた Société Française de Médecine et Chirurgie du Pied (SFMCP) でも特別講演を行わせていただき、フランスには2つの足の外科学会があることを知りました。この2つの学会は今でも併存しており、2019年には、現在私が理事長を務めさせていただいております日本足の外科学会を AFCP の guest nation として招待いただき、大変歓迎していただきました。AFJO に関しましては、2011年のボルドーでの第11回からの参加になります。毎回フランスの独創的な整形外科に大きな刺激を受け、またフランスと我が国の文化交流、会員同士の親睦も大変楽しませていただいております。コロナを乗り越えて、ご参加いただいた方々の心に深く刻まれるような学会開催を目指して、しっかり計画していきたいと考えております。是非皆さま、春爛漫、桜満開の奈良にお越し下さいますようお願い申し上げます。

奈良県立医科大学 整形外科学教室 教授 田中康仁



# 第20回日仏整形外科学会 開催のご案内

(20ème Réunion de la Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)

## 【第20回日仏整形外科学会 (SOFJO) の開催にあたってのご挨拶】

この度、第20回日仏整形外科学会 (SOFJO) を2023年の初夏に横浜で開催させていただくことになりました。私は本学会の交換研修を足掛かりに2003年8月からの2年間、フランス留学を経験させていただき、多くのことを学んで帰りました。それから丁度20年にあたるこの年に歴史ある本学会を担当させていただくこととなり、運命的なものを感じるとともに大変名誉なことと存じております。

今回は、私の出身大学である昭和大学医学部整形外科教室 稲垣克記主任教授のご後援をいただき、昭和大学整形外科同門会の協力のもとに、皆様の記憶に残る実りある会になりますように鋭意努力して準備を進めさせていただく所存であります。

さて、今回の開催予定地の『横浜』ですが、シルクを介してフランスとは深い繋がりがあることはご存知の方が多いかと思えます。19世紀にヨーロッパで発生した蚕の疫病によりフランスの養蚕業は壊滅状態に陥りますが、この時に日本各地から開港直後の横浜港を経てフランスに送られた生糸が同国の経済復興を支えます。このご縁が発展して、横浜市とフランス第二の都市であるリヨン市が姉妹都市となったのが1959年、以来60年以上の友好関係が続いています。2005年より毎年初夏のこの時期に横浜では『フランス月間』と呼ばれる映画、アート、音楽、美食などのイベントが1ヶ月に渡り開催されています(残念ながら2020年はコロナの影響で中止となりました)。

横浜は日本最大級のコンベンションセンターを有しているため、今までに何度も来訪されている方が多いかと思えます。コロナ禍、まだ先が見えず、講演予定などの詳細は全く決まっておきませんが、比較的にじんまりしてアットホームな雰囲気である本学会の利点を活かして、フランスを愛してやまない先生方、そしてご同伴の方々にも、“歴史と情緒の街 横浜”をご堪能いただけるよう一工夫を加えていきたいと考えております。

本学会への多くの皆様のご参加を心からお待ち申し上げます。

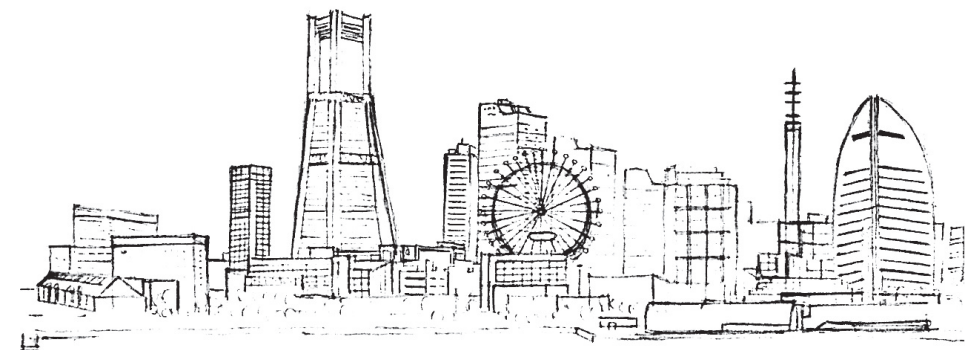
横浜南共済病院整形外科 柁原俊久

## 【(仮設)主催事務局】

横浜南共済病院整形外科・人工関節センター

〒236-0037 神奈川県横浜市金沢区六浦東1-21-1

TEL 045-782-2101 FAX 045-701-9159 E-mail: kajifr@minamikyousai.jp





1



### 仏日・日仏整形外科学用語集

仏日整形外科用語集は森崎直木先生が編集を行われ、1989年に第1版が文光堂から出版されました。その後、1991年に改訂版が出版されましたが、森崎直木先生が亡くなられて以降、改訂されることなく現在に至りました。フランスの整形外科を知るためにはどうしてもフランス語の論文を読む必要がありますので、森崎先生の仏日整形外科用語集は非常に有用な辞書でした。しかし、医学の進歩に用語集も追いついて行く必要があると考え、日仏整形外科学会が中心となってその後の時代に於いて出現した新語を大幅に追加して新しい用語集の編集を行なってまいりました。最終的には単語数は仏日がおおよそ7000語、日仏はおおよそ6200語となりました。編集にあたりましては、日本整形外科学会学術用語委員会から綿密な指導をいただき、また最後には診断と治療社編集部のみなさんの度重なる校正を受けて2013年5月に出版の暁となりました。

購入希望がありましたら事務局までご連絡下さい。診断と治療社のホームページからでも購入していただけます。また、会員の方は学会ホームページからダウンロードもできます。是非ご活用下さい。

2

Welcome to So.F.J.O Homepage  
ようこそ日仏整形外科学会 (SOFJO) のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

<http://www.sofjo.gr.jp/>

です。  
是非のぞいてみてください。

- ・新着/NEWS
- ・沿革
- ・活動内容
  - 入会のご案内
- ・役員紹介
- ・共同研究
- ・交換研修
  - 交換研修帰朝報告
- ・会誌INFOS
- ・仏日・日仏整形外科用語集
- ・日仏整形外科協議会 (AFJO)
- ・AFJO (English)
- ・関連リンク集

3

#### 2019年度会計報告

歳入の部	(単位：円)
会員年会費	1,044,000
用語集販売	0
企業寄附	190,000
会員寄附	0
広告料	370,000
預金利息	12
前年度繰越金	3,572,874
計	5,176,886

#### 2020年度事業費予算編成

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	1,528,000
用語集販売	3,600
企業寄附	1,000,000
会員寄附	0
広告料	500,000
預金利息	3
前年度繰越金	2,555,751
計	5,587,354

#### 歳出の部 (単位：円)

日本人交換整形外科医奨学金 (3名) 渡航費+滞在費(一部)	300,000
フランス人交換整形外科医奨学金 0名	0
SOFJO/AFJO開催関係費	1,000,000
日仏整形外科学会関連事業(表彰など)	0
日仏共同研究、研究助成金	0
インターネットホームページ維持管理費	151,879
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	32,620
事務費	0
アルバイト代	192,000
会議費	20,196
旅費・交通費	278,600
印刷費	640,200
雑費	5,640
出金小計	2,621,135
次年度繰越金	2,555,751
計	5,176,886

#### 歳出の部 (単位：円)

日本人交換整形外科医奨学金 渡航費+滞在費(一部) 100,000×4名	400,000
フランス人交換整形外科医奨学金 滞在費(2ヶ月)+交通費 100,000×2名	200,000
SOFJO/AFJO開催関係費	1,000,000
日仏整形外科学会関連事業(表彰など)	20,000
日仏共同研究、研究助成	200,000
インターネットホームページ維持管理費	350,000
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	120,000
事務費	30,000
アルバイト代	300,000
会議費	26,310
旅費・交通費	180,000
印刷費	650,000
予備費	30,000
出金小計	3,506,310
次年度繰越金	2,081,044
計	5,587,354



## 4

### これまでに交換研修に参加された先生方

年度	氏名	所属
1990	稲毛 昭彦	大阪医科大学
1991	三輪 隆	帝京大学
1991	末松 典明	旭川医科大学
1992	星 忠行	弘前大学
1992	村上 元庸	滋賀医科大学
1992	久保 俊一	京都府立医科大学
1993	小浦 宏	岡山大学
1994	西川 真史	弘前大学
1994	岩崎 幹季	大阪大学
1995	石澤 命仁	滋賀医科大学
1995	安永 裕司	広島大学
1996	安間 基雄	順天堂大学
1996	寺門 淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応義塾大学
1997	益田 和明	岐阜大学
1997	金子 和生	山口大学
1998	山川 徹	三重大学
1998	岡本 雅雄	大阪医科大学
1999	清重 佳郎	山形医科大学
1999	川崎 拓	滋賀医科大学
2000	宮本 敬	岐阜大学
2000	藤井 一晃	弘前大学
2000	細野 昇	大阪大学
2001	鳥飼 英久	千葉大学
2001	久我 尚之	九州大学
2002	瀧川 直秀	大阪医科大学
2002	松峯 昭彦	三重大学
2003	柘原 俊久	昭和大学藤が丘病院
2003	矢吹 有里	慶応義塾大学
2004	和田 孝彦	関西医科大学
2004	久留 隆史	広島大学
2004	小山内俊久	山形大学
2005	小田 幸作	高槻赤十字病院
2005	松尾 篤	九州大学
2006	小室 元	阪和住吉総合病院
2006	城戸 顕	奈良県立医科大学
2006	早稲田明生	国際親善総合病院
2007	益田 宗彰	総合せき損センター
2007	黒住 健人	高知医療センター
2007	菊池 克久	滋賀医科大学整形外科
2008	上島圭一郎	京都府立医科大学
2008	水野 直子	行岡病院
2008	金澤 博明	順天堂浦安病院
2008	渡辺 千聡	大阪医科大学
2009	浅田 卓	関西医科大学
2009	山本りさこ	広島大学
2010	塚本理一郎	湘南鎌倉人工関節センター
2010	奥村 法昭	滋賀医科大学
2011	久保田光昭	順天堂大学
2011	西脇 徹	慶応義塾大学
2011	斉藤 朝海	東京女子医大膠原病 リウマチ痛風センター

年度	氏名	所属
2011	金城 健	沖縄県立南部医療センター
2012	齋藤 正純	京都府立医科大学
2012	成尾 宗浩	東名厚木病院
2012	渡辺 新	高萩協同病院
2012	小池 洋一	仙台赤十字病院
2012	長谷川浩士	公立置賜総合病院
2013	野口 森幸	仙台赤十字病院
2013	相川 淳	北里大学
2013	高澤 誠	千葉大学
2013	市原 理司	順天堂浦安病院
2013	百村 励	順天堂大学
2013	二村 昭元	東京医科歯科大学
2013	越智 健介	東京女子医大膠原病 リウマチ痛風センター
2013	吉田 雅人	名古屋市立大学
2013	竹本 充	京都大学
2013	田村 太質	大阪府立母子保健 総合医療センター
2014	江口 和	下志津病院
2014	深沢 克康	関東労災病院
2014	児玉 成人	滋賀医科大学
2014	荒瀧 慎也	岡山大学
2014	大槻 周平	大阪医科大学
2015	菊池 克彦	千早病院
2015	木島 泰明	秋田大学
2015	木田 圭重	京都府立医科大学
2016	藤城 高志	大阪医科大学
2016	岩田 浩志	あい小児医療総合センター
2017	蒲生 和重	ベルランド総合病院
2017	岡本 純典	大阪医科大学
2018	迫間 巧将	尾道市立市民病院
2018	入村 早苗	東京都保健医療公社大久保病院
2018	林 和憲	大阪市立大学
2018	折田 純久	千葉大学
2018	田中 秀達	仙台赤十字病院
2018	井下田有芳	順天堂大学
2018	内田 勲	栃木医療センター
2018	田邊 智絵	昭和大学江東豊洲病院
2018	新谷 康介	大阪市立大学
2019	田中 秀達	仙台赤十字病院
2019	金澤 憲治	みやぎ県南中核病院
2019	岡崎 良紀	岡山大学
2019	平川 義弘	大阪市立大学
2019	岩井智守男	岐阜大学
2019	木澤 桃子	大阪医科大学
2019	前田 勉	滋賀医科大学
2020	西頭 知宏	自治医科大学
2020	萩原 茂生	千葉大学
2020	後藤 賢司	順天堂大学
2020	竹村 宜記	滋賀医科大学

## 5

### これまでにフランスから交換研修医として来られた先生方と研修施設

年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LIVERNEAUX	京都府立医科大学・ 広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・ 滋賀小児センター・ 福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・ 九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・ 東海大学・ 札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・ 岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・ 新潟手の外科研究所・ 広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・ 岡山大学・ 国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・ 福岡県立柏屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・ 京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2000	Olivier CHARROIS	京都市立病院
2001	Laurent JACQUOT	福岡整形外科病院・ 慶応義塾大学・ 高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・ 山形大学
2004	Brice ILHARRBORDE	総合せき損センター・ 大阪市立大学
2007	Damien BREITEL	総合せき損センター・ 奈良県立医科大学
2007	Sybille FACCA	弘前大学・山形大学・ 京都府立医科大学・ 広島大学
2008	Thomas APARD	山形大学・ 大阪府立母子保健総合医療センター
2009	François LINTZ	京都市立大学
2012	Chihab TALEB	広島大学・山形大学・ 弘前大学・帝京大学・ 順天堂大学・順天堂静岡病院

## 6

寄附金を頂戴いたしました。  
ご協力ありがとうございました。

株式会社洛北義肢

株式会社松本医科器械

松本アンプリチュード株式会社

旭化成ファーマ株式会社

### 編集 後記

2020年はCovid-19に振り回された1年でした。コロナが猛威を振るう12月の神戸で、ハイブリッド形式という新手法で第19回SOFJO開催を成功させられた星忠行先生には心から敬意を表します。また、感染者がでなかったことは現地参加された先生方お一人お一人の感染対策のおかげであると感謝申し上げます。当学会の最大の役割の一つである日仏交換研修もコロナによって大きな影響を受けておりますが、パンデミック直前のフランスから帰国されたお二人の先生から本誌に帰朝報告を頂くことができました。Mercel KERBOULL先生の追悼文を下さいました田中千晶先生と柘原俊久先生に深く感謝申し上げます。この偉大なフランス人医師のこと、フランスでこんなにも深く勉強なさった先生方のことを、今後留学される先生たちにもぜひ知ってほしいと思いました。新ホームページ紹介コーナーでは、「あのサンドイッチが白黒になるのは恐ろしい・・・」との青木先生からのご提案でカラーページを導入しました。好評でしたら、今後も予算を見ながら拡充できればと考えております。Dr KISHIからはフランスで整形外科医になる方法についてとても貴重な記事を頂戴することができました。パンデミックで困難な状況下にも関わらずご寄稿くださり感謝します。また、吉田ジェイソン君にはDr KISHIの英文記事作成に貢献いただきました。岸先生はフランス育ちの日本人ですが、吉田君はアメリカ育ちの日本人で、日本の医師免許取得のために滋賀医科大学で勉学に励んでおられます。彼の今後のご活躍を期待しております。

コロナの影響で今年のINFOSの内容が少なくなってしまうのではないかと懸念しておりましたが、皆様のご協力によって充実したものに仕上がったと喜んでおります。末筆になりましたが、この困難な状況で医療に携わっておられる先生方のご健康とご多幸を祈念しております。

(前田 勉)



THE NEW VALUE FRONTIER



# Initia<sup>®</sup> Hip System

SQRUM シェル 【医療機器承認番号：22500BZX00323000】  
Aquala ライナー 【医療機器承認番号：22300BZX00234000】  
BIOCERAM AZUL ヘッド 【医療機器承認番号：22600BZX00510000】  
Initia ステム 【医療機器承認番号：22800BZX00145000】

「Initia」は京セラ株式会社の登録商標です。

京セラ株式会社 メディカル事業部 本 社 京都市伏見区竹田鳥羽殿町6番地 〒612-8501 Tel.075-778-1980  
東京事業所 東京都品川区東品川3丁目32-42 I・Sビル 〒140-8810 Tel.03-5782-7006

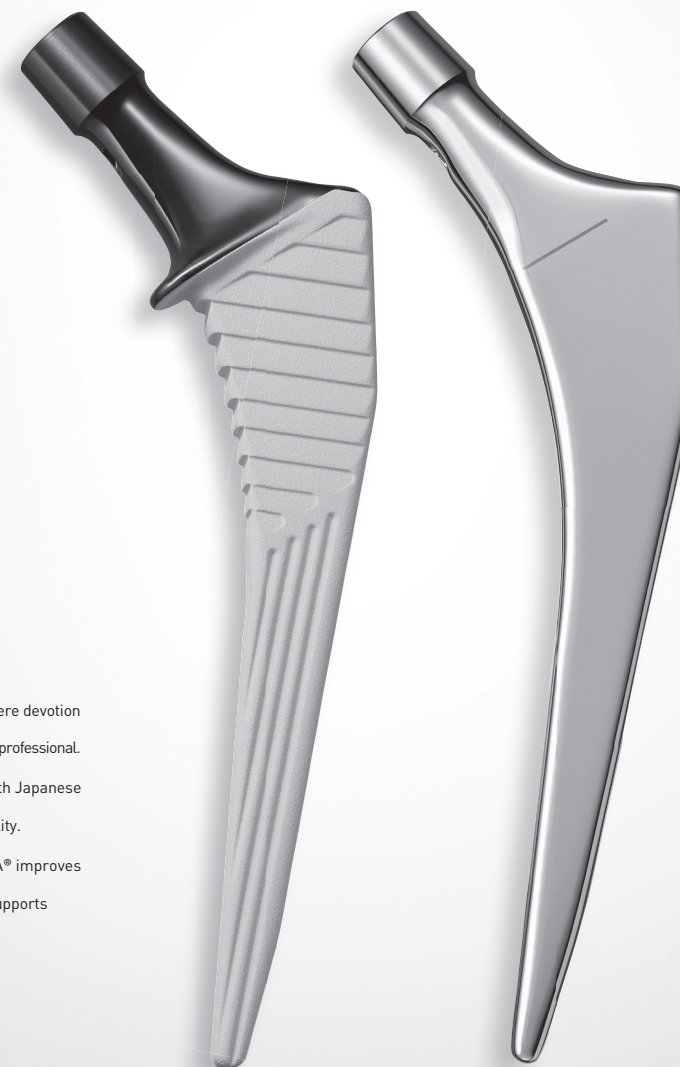
札幌営業所 Tel.011-280-6020 大宮第2営業所 Tel.048-640-7779 大阪営業所 Tel.06-6350-1017 広島営業所 Tel.082-568-8538  
東北営業所 Tel.022-216-5176 名古屋営業所 Tel.052-930-1481 岡山営業所 Tel.086-803-3620 九州営業所 Tel.092-452-8140

[www.kyocera.co.jp/prdct/medical/index.html](http://www.kyocera.co.jp/prdct/medical/index.html)

© 2017 KYOCERA Corporation

**TEIJIN**  
Human Chemistry, Human Solutions

# ユニバーシア UNIVERSIA<sup>®</sup>



UNIVERSIA<sup>®</sup> stem integrates sincere devotion and wisdom of experienced medical professional.

UNIVERSIA<sup>®</sup> stem is delivered with Japanese engineering pride and global quality.

We are confident that UNIVERSIA<sup>®</sup> improves the patients' Quality of Life and supports surgeon-friendly operation.

UNIVERSIA<sup>®</sup> is an INNOVATION.

製造販売業者

**帝人ナカシマメディカル株式会社**

〒709-0625 岡山市東区上道北方688-1 TEL.086-279-6278 FAX.086-279-9510

UNIVERSIAセメントレスステム 医療機器製造販売承認番号:30100BZX00272000  
UNIVERSIAセメントステム 医療機器製造販売承認番号:30100BZX00259000



**MATHYS**   
European Orthopaedics

twinSys and Mathys ceramic head

# Clinical evidence

販売名: twinSys セメントレス システム  
医療機器製造販売承認番号: 22600BZX00358000  
販売名: symarec フェモラルヘッド  
医療機器製造販売承認番号: 22700BZX00423000

→ 製造販売元 株式会社マティス 〒108-0075 東京都港区港南2-12-27イケダヤ品川ビル  
Tel 03 3474 6900 (代表) • Fax 03 3474 6906 • [www.mathysmedical.com](http://www.mathysmedical.com)

X-Ray by courtesy of Prof. Beck

## *Creating for Tomorrow*

昨日まで世界になかったものを。

私たち旭化成グループの使命。

それは、いつの時代でも世界の人びとが“いのち”を育み、

より豊かな“暮らし”を実現できるよう、最善を尽くすこと。

創業以来変わらぬ人類貢献への想いを胸に、次の時代へ大胆に応えていくために一。

私たちは、“昨日まで世界になかったものを”創造し続けます。

# Asahi**KASEI**

旭化成ファーマ株式会社



# ATTUNE®

Knee System



 **Attune®**  
Knee System  
Stability in Motion

まだないくすりを  
創るしごと。

世界には、まだ治せない病気があります。

世界には、まだ治せない病気とたたかう人たちがいます。

明日を変える一錠を創る。

アステラスの、しごとです。

明日は変えられる。



[www.astellas.com/jp/](http://www.astellas.com/jp/)

患者さんの  
Quality of Lifeの向上が  
テイジンの理念です。

**TEIJIN**  
Human Chemistry, Human Solutions

帝人ファーマ株式会社 帝人ヘルスケア株式会社 〒100-8585 東京都千代田区霞が関3丁目2番1号





ヒト型抗ヒトTNF $\alpha$ モノクローナル抗体製剤  
シリンジ:薬価基準収載  
 オートインジェクター:薬価基準収載

**シンポニー**® 皮下注 50mg シリンジ  
 皮下注 50mg オートインジェクター  
ゴリムマブ(遺伝子組換え)製剤  
 Simponi® Subcutaneous Injection  
 生物由来製品 劇薬 処方箋医薬品\*  
 \*注意—医師等の処方箋により使用すること



「効能・効果、用法・用量、警告・禁忌を含む使用上の注意」等の詳細につきましては添付文書をご参照ください。

製造販売元 (資料請求先) **ヤンセンファーマ株式会社**  
 〒101-0065 東京都千代田区西神田3-5-2  
 www.janssen.com/japan  
 www.janssenpro.jp (医薬品情報)

販売元 (資料請求先) **田辺三菱製薬株式会社**  
 大阪市中央区道修町3-2-10

©Janssen Pharmaceutical K.K. 2019 2019年6月作成

医療を支える企業としての使命感を忘れずに  
 今までもこれからも…いつも生命のそばに



京都本社: 〒612-8412 京都市伏見区竹田中川原町381番地  
 TEL 075-641-1496 FAX 075-641-0010  
 大阪支店: 〒569-1145 大阪府高槻市富田丘9番5号  
 TEL 072-696-1496 FAX 072-696-1961  
 東大阪支店: 〒577-0062 大阪府東大阪市森河内東1丁目26番19号  
 TEL 06-4308-5710 FAX 06-4308-5772  
 神戸支店: 〒651-2113 兵庫県神戸市西区伊川谷町有瀬977番地1  
 TEL 078-975-3015 FAX 078-975-3016  
 滋賀支店: 〒524-0041 滋賀県守山市勝部6丁目4番36号  
 TEL 077-582-7770 FAX 077-582-7796  
 奈良営業所: 〒639-1124 奈良県大和郡山市馬司町130番地  
 TEL 0743-23-1496 FAX 0743-23-1497  
 京浜営業所: 〒210-0856 神奈川県川崎市川崎区田辺新田1-1  
 TEL 044-328-6270 FAX 044-333-0121

病 医 院 設 備  
 医 療 機 器  
 介 護 用 品  
 病 医 院 の 開 業 支 援

世界中の人々の  
 より豊かな人生のため、  
 革新的医薬品に  
 思いやりを込めて



*Lilly*

日本イーライリリーは製薬会社として、  
 人々がより長く、より健康で、  
 充実した生活を実現できるよう、  
 がん、糖尿病、筋骨格系疾患、  
 中枢神経系疾患、自己免疫疾患、  
 成長障害、疼痛などの領域で、  
 日本の医療に貢献しています。

**日本イーライリリー株式会社**  
 〒651-0086 神戸市中央区磯上通 5-1-28  
 www.lilly.co.jp

肩外転装置 ケンバッグスリング

Sling  
**Kenbag**

- 左右兼用 & フリーサイズ
- 両肩支持 & 負荷バランス調整
- コンパクト & MRI 対応



ISO 9001 認証取得企業  
 必要とされるひとに 必要とされるものを 必要なときに…

株式会社 **洛北義肢**  
リニカ  
 アドバイザ  
 〒603-8487 京都市北区大北山原谷乾町22-16  
 TEL 075-462-0195 FAX 075-463-2140  
 URL http://www.rakuhokugishi.co.jp/

株式会社 **リハビテック**

〒603-8487 京都市北区大北山原谷乾町22-16  
 TEL 075-464-0034 FAX 075-464-0044  
 E-mail info@rehabitech.co.jp URL http://www.rehabitech.co.jp/

Rehabitech  
 REHABILITATION TECHNOLOGICAL CORPORATION